

『ひびきの石』

作

日下部

信

場面1／平成八年（一九九六年）九月〈四ツ山中腹〉

残暑厳しい頃。堅坑やぐら爆破の日。

四ツ山の中腹。ひとりの老いぼれた男がいる。

石に腰かけ、パイプをくわえている。

ヘリコプターの音。

ラジオの音が流れていて、中継のアナウンサーの声。

MC さて、もうまもなくだとは思いますが、こちらからはまだその様子は見えません。何か作業が遅れているのでしょうか。

徳多はラジオを気にする。

MC ではここで簡単に、三池炭鉱の歴史について振り返っておきますと、この三川坑では堅鉱やぐらが二棟建設され、大正末期に運転を開始したと記録が残っております。：えつ、：はい？（ミスした感じ）ああつ、すみません。：えー大変申し訳ございません。ここは三川坑ではなく四山坑にあります堅鉱やぐら前です、訂正しお詫び申し上げます。さて現在、解体のためのダイナマイトによる発破作業が進められているわけですが、

徳多がぶつきらぼうにラジオのスイッチを切る。

そこへ誰かがやってくる。

徳多（独り言）何ば言いよるとか。四山は昔から四山くさい。：どげんしたら間違うつとか。

徳多がぶつくさ文句言う。

徳多、なにやら胸部に痛み。奇声を発するほどになる。

妻の多恵子が急いでやってきて徳多の背中をさする。

徳多 いててて。急にどげんしたとかな。

中島 …だ、大丈夫ですか。

多恵子 えっ？

中島 すみません、突然。

多恵子 ああ、大丈夫です、ありがとね。：えーあんたは？

中島 え、その

多恵子 このへんの人じゃなかね？

中島 ええ。ちよっと観光で東京から。

多恵子 そうでしたかあ。すみませんね、驚かんでください。あんやぐらが壊されるて聞

いて機嫌わるかです。許してやってください。

ヘリの音。

徳多 ……こいからな、ダイナマイト仕掛けて、あつという間にボン！つよ。

夢道 ええ。

徳多 今までん歴史も一緒にばーっとなくなつとやけん…で、あんたは…？

夢道 中島と言います。こんにちは…。

徳多 (独り言)ここんはき、観光すつとこなかばい。

多恵子 何か御用で？

夢道 苦しそうにされていたので。

多恵子 そいなら気にせんで下さい。よくあることですけん。

徳多 茶ば持つてこんか。

多恵子 よかですけど、あんまりお若い人ば引きとめちや。

徳多 よかうるさか。おつの場所じゃここは。

多恵子 じゃあ麦茶持つてきますけん、どっか行かんごとしとつてくださいよ。

多恵子は徳多からぞんざいに扱われるが、素直にきいて去る。

夢道 つかぬことお聞きするんですが、「龍二」という人をご存知ですか？

徳多が夢道の顔を見る。ほんの少し見合うふたり。

夢道 昔、ここに住んでいて、(言い馴れない口調で)炭鉱マンだった人なんです。

徳多 ……。

夢道 ご存じない、ですか？

徳多 龍二ば知つとるとか？

夢道 ご存知でしたか？前に仕事の関係で知り合いましたね。たしか名字が、

徳多 (鋭く反応する)岸岡。

夢道 ……良かった、やっぱりここに。

徳多 一緒に炭ば堀よつた仲間たい。

夢道 えっ？

徳多 なら、龍二がどげんしとつたとか知つとるとね。

夢道 ……それが…残念ながら今年の春先になくなられたと。

少し間。

徳多 死んだつか。

夢道 もしよかったら、何でもいいんです、岸岡さんのこと教えてくれませんか。

徳多 断る。

夢道 えっ？

徳多 もう忘れてしもうた。何にもなか、覚えとらん。

夢道 そんな。

徳多 もう帰らんか。こげんかどこ来たっちゃいっちゃん面白いことなんかなかぞ。

徳多、昔を懐かしみ、草むらのレールに耳を当てるような仕草。

夢道、ふと草むらの中にレールが敷かれていることに気づく。

夢道 あれっ？レールですか？こんな山の中腹に？

徳多 三池鉄道が通った。貯炭場ちゅうがあそこに炭のいっばい置いてあろうが。あん中にもよう見たらレールがまだ残つとる。

夢道 (つぶやくように)あそこに町があつた。(なんて信じられない)

徳多 昭和40年の、四ツ山鉾閉鎖で消えてしもうたけどな。

少し間。

徳多 なして岸岡龍二のことば？

夢道 いや調べてるわけじゃないんですよ。ただ、よくあの人は僕に・・・九州の話をしてくれたんです。でも、まだ九州に来たことがなかったもんですから、一度はと思つて。あつひとつお聞きしたいんですが。

徳多 (本当にさりげなく)なん？

夢道 死ぬ間際、龍二さんは意識朦朧としながら周りにこう言葉を残したそうです。「・・・おりの石はもう何も聞こえんのやろうか？おりの石はまだ三池にあつとばってんなあ」・・・分かりますか？この言葉の意味。

徳多 ……。

セミの声が強くなる。徳多が苦しみます。

多恵子が麦茶を持つてくる。

多恵子 お父さん。

夢道 すみません。話していたらまた急に。

多恵子 今日はいっばい喋ったけん、もう休んだほうがよかとよ。さつ日陰に入つて。

徳多 (急に怒り出す)うるさか！日陰なんかもうたくさんたい！おっはずつと堀りよつたとぞ。ずーつと暗か、真つ暗な穴の中で来る日も来る日も堀りよつたとぞ。

夢道 徳多さん…

徳多 みんな若か頃のことたい。三池の大きな歴史の中にどつぶりつかつた頃の事たい。昭和35年、辛か…闘争の頃たい。

音楽鳴り、闇に沈むように、急激に速度を増して、徳多の回想が始まる。

場面2／昭和三十五年（一九六〇年）〈三池争議ダイジェスト〉

M C 戦後から昭和30年代前半まで、三井三池炭鉱は、重化学エネルギーの源泉としてもてはやされ、戦後日本復興の大きな原動力となった。石炭が「黒ダイヤ」と呼ばれ、大牟田の地が炭の都「炭都」として全国に知られたのもこの時代のことである。

炭が大量に掘り出され、コンベアーによって運ばれていく。

M C 三池炭鉱を経営する三井鉱山は三池の石炭によって資産を蓄え、「三井の財産は三池で掘られた」とまで言われた。しかし一方で昭和30年代、政府のエネルギー転換政策を背景に、三井は徹底した合理化を押し進めることになっていったのである。

デモ行進の様子。労働者の声！「首切り反対」などの看板

M C 昭和34年12月、その前年同様、会社は第二次首切りを強行。労働者1492人に退職勧告状が送りつけられる。しかし、労働組合は一致団結し、その一切を拒否。以降、本格的な争議運動となってゆく。

闘争の様子。

M C 昭和35年1月25日、三井鉱山ロックアウト。会社側は組合の資金源を絶ち、切り崩しを狙う。三池労組はただちに無期限全面ストライキで応酬。

ピケラインが張られる。人間によって出来る壁。

M C しかし昭和35年3月17日、労働組合が内部分裂。黒いベレー帽の第二組合員が誕生した。三池労組の人々の憎しみは会社ではなく、新たな組合員に向けられた。

分裂。人と人が向かい合う。

第一 「裏切りモン！そげん金がほしかか！」

第一 「金んためやったら仲間ば売るとやね！」

第二 「なんね、旧労が！」

第二 「仕事もせんで何ば言いよるとか！」

第一 「第二に成り下がった貴様らば、おいは死ぬまで許さんけんね！」

第二 「こっちこそ、お前ら旧労から受けた心の傷はずっと消えんぞ！」

取っ組み合いのケンカ。人々入り乱れる。

M C 昭和35年3月28日早朝、三川鉦事件。会社とともに強行就労を凶った新労組
合員が三川鉦に突入し三池労組のピケ隊と激突。ついに警官隊2千名が動員される。

混乱する現場。悲鳴も聞こえる。

M C 翌日3月29日、労働組合員刺殺事件。ある労働組合員の死。享年32歳。妻と、
9歳の長男、5歳の長女を残して天国へ。

ヘリの音。

M C 同年7月7日、福岡地裁はホッパー立ち入り禁止の仮処分を決定。7月15日には
応援の警官隊が大牟田に集結する。

隊列が次々と変わってゆく。

M C 更に7月17日、福岡県警本部長が現地入り。特別警備本部が設置され、全国か
ら集められた警官隊は一人。パトカー40台、装甲車5台、放水車3台、ヘリ一
機、催涙弾千発、その他、発煙筒、照明弾など。ものものしい雰囲気にも包まれる。

M C 7月19日、池田内閣、初閣議。警官隊とピケ隊の衝突を避け、争議の解決を目指
す方針が発表される。

M C いよいよ三池の闘いはクライマックスを迎えることになる。

全員、正面を向く。

M C 7月20日、万人の警官隊に出動命令。昼の3時15分頃のことである。

M C 3時30分、警官隊の先頭車が三川鉦付近に接近。

M C 3時45分、労組ピケ隊がピケラインを緊急配備。一気に緊張感が高まる。

M C ところが突然、警官隊が目の前でUターンを始める。ピケ隊に警官隊撤退の知らせ！
午前3時東京で、中央労働委員会が最終斡旋案・白紙委任を労使の代表に要求。交
渉に動きが出たこの知らせが現地に入り、警官隊の緊急回避となったわけである。

M C そして8月10日、注目の中、最終斡旋案を発表。

M C 労働組合、どんでん返しで事実上の敗北。組合員たちは絶望の極みであった。

M C 11月1日、スト解除・就労宣言。長かった闘争が終わりを告げる！

組合員たち、呆然としたまま、溶暗。

場面3／昭和三十五年（一九六〇年）十一月〈もうひとつの組合〉

三池鉄道の汽笛が鳴る。繁吉が慣れないカメラで、どうやら汽車を撮っていた様子。龍二の家だが、誰もが自由に出入りしている。

奈津子 あら？繁吉？…またカメラ？

繁吉 うん。

奈津子 よう汽車の通るけん、洗濯もんの干されんよ。

繁吉 ぱっぱ炭ば散らしていくけんね。

奈津子 あんたは坑内に下るより、そがんかとのほうが好いとつちやる。

繁吉 そうやるか。

奈津子 あっそうだ、のぶさん、見らんやった？

繁吉 うん、見とらんけど。

奈津子 近頃は龍二さんがうちん人ばよう遊びに連れ出すけん、ろくなことなか。

繁吉 龍二さんは誰でん巻き込むけんね。のぶさんば見かけたら奈津子さんの心配しとつたよつて言うとかけん。

奈津子 そう、じゃあお願いね。さてと…晩の仕度ばせないかんね。一日の早かね。

奈津子が去り、繁吉がまたカメラを大切に扱う。

入れ替わりに、ホステスの梅子と、そのあとから見知らぬ男・境がやって来る。

梅子 はい、こっち、龍ちゃんの家ならここよ。ここ。

境 いやあ、ありがとうございます。

梅子 でも龍ちゃん、今日、映画がどうだとか言ってたから、おらんかもね。

境 映画…？

梅子 遅くなるとやなかかな。繁吉そがんよね？

繁吉 （梅子に）あん人は？

梅子 龍ちゃんの知り合いらしか。

繁吉 そがんね。

梅子 じゃ、繁吉、あとよろしくね。

繁吉 もう出勤ね？

梅子 うん。（境に）じゃあうちはこのへんで。

境 どうも、ありがとうございます。

繁吉 あとでこん人と店にくるかもしれないけん。

梅子 そげんかこつば言うて結局はかわいかコのおる店ばっかり行きよるやんね。

梅子去る。境、不思議そうに見る。

繁吉 どげんしますか？

境 えっ店ですか？

繁吉 いや、龍二さん。

境 ああ、もう少し待ってみましょうかね。

繁吉 (明るく) じゃあゆっくりしとってください。

カメラを拭いている繁吉。境が話しかける。

境 龍二さんのお宅は、いつもこう(空けっぱなし)なんですか？

繁吉 ああ。このへんじゃ珍しくなかなですよ。よう近所の人の来とりますけんね。やけん

鍵なんかかけんとですよ。

境 へえく。：あつ、それ、ミノルタでしょ？

繁吉 えっ、知つとつとですか？

境 ああ言つてませんでしたね、私、今、しがたい出版社をやつてましてね。カメラマンともよく一緒に仕事をするので。

繁吉 へー：おりもそげんか道に進めば良かったかな：。

境 いやいや、あなたならまだ大丈夫ですよ、何でも出来ますよ。

繁吉 ばつてん、おつはもう炭鉱マンですけん。

境 こういうのどうでしょうね。もしも、いい写真が撮れたら、私に見せて下さい。それで魅力的な写真だったら私が買い取りますから

繁吉 おつが撮つたやつをですか？

境 そうだな、例えば、炭鉱マンの日常生活、坑内で働いている様子、真に迫る姿を見てもいいですね。時にはそりゃケンカをしたり、酒に酔いつぶれることもあるでしょう。でもそういうことも全て含めて、すばらしい作品になります。

繁吉 やつてみたかあ！いろいろ撮つてみますけん、写真の出来たら見てもらえますか？

境 そうですか。じゃあ頼みます。

繁吉 はい。

境 あつただし、このことは絶対、秘密にしてください。もちろんあなたの仲間たちにも、知らせないほうがいい。

繁吉 えっ？

境 より自然な形で写真は撮る必要があります。もしあなたが写真を撮つてると知つたら、皆さん緊張してしまつていい写真が撮れませんからね。絶対に、これ(しーっ)で。

繁吉 これ(しーっ)ですね。はい。

そこへ他の仲間たちが龍二の家にやつてくる。ソフトボールの練習の帰り。
徳多、正嗣、貫一、長尾、千夏がいる。

繁吉 あつみんな帰つてきたごたですね。ああ、ソフトボールの練習。

境はこっそり邪魔にならない場所に。

貫一が声を荒げている。手にはバナナなど食い物。

貫一 よかですけん：・ほんなこつもう：・もうおりのことはほつとつてくれんね。
長尾 貫一そげん言うなよ。

千夏 そうたい、兄ちゃんが働かんやったらうちは学校も行けんやんね。

長尾 ずーっと働かんって言いよつとやなか。とりあえず今はもう坑内に下りとうはなかつたたい。

正嗣 なしてや貫一、そいは本気で言いよつとか。

貫一 はいイ。

正嗣 やめてなんばすつとか。

貫一 ：ソフトボールばしたかとです。

正嗣 ええ？

貫一 千夏の速か球ば受けきるのはおっしかいませんけん。

千夏 そげんわけの分からん兄ちゃんやったら受けてほしくはなか。

みんな、あきれる。

正嗣 トクさん、何か言うてやってくれんね。

徳多 確かに千夏の速球ば受けきるつとは兄貴のお前しかおらん。

正嗣 トクさん。

徳多 おつたちのチームが強くなんならそいでもよかつちやなかか。

正嗣 そげん言わんでからくさい。

貫一 やっぱトクさんばいね、おりの気持ちの分かつてくれとる。

徳多 あんな、貫一、

徳多がさりげに貫一のところに来て、優しく語りかける。

徳多 こん前まで長いこと争議の続いて、お前はそん間、よう、みんなの飯んことば心配してくれた、他んやつが休んどつ時でつちや畑に行つて、女子(おなご)こらが芋やらにんじんやら作る、そん手伝いばしてくれよつた。そげんかとはお前のほんなこつ良かところたい。：・ばつてんな：・今、おつたち炭鉱マンは、また坑内に下つて、炭ば掘るとが仕事たい。そいが炭鉱マンの唯一、絶対の仕事たい。こいは誰から頼まれたわけでんか、自分が選んだ仕事たい、そう思うつてやらんとしよんなか。なかつちやけん、やらんと人間のクズになるとぞ(だんだん腹立てて)そいでもよかとか貫一、つまらんとぞ、ふぬけの役立たずぞ、こらつ怠けて太つてもよかとか、一生逃げて楽なほう楽なほう行くだけでよかとか？こらつ、答える貫一、ならいつそ怠けて腐つて死んでしまえ、お前はもうゴミたいゴミ、いやゴミ以下、失格たい

正嗣 トクさん、そげん言わんでからくさい！

徳多、優しい言葉をかけてると思つていたら罵詈雑言の嵐。

慌てて、周りは止める。貫一は悲しみのあまり、口にいつぱいバナナを

ほおぼる。

貫一 うおー。

繁吉 あんバナナは？

長尾 龍二さんが腹減るやろってグラウンドまで持ってきてくれたとです。

徳多 ……そげんぶくぶくしとったら、いづれ坑内の真っ暗か穴に体のつかつかって抜け出られんで死ぬたい

正嗣 トクさんもうやめんね〜！

徳多、不機嫌そうに貫一から離れる。

正嗣 まあ貫一、徳さんもありや愛情の裏返したい。もう一度よく考えてみらんか。なんならあとで龍二に相談してみればよかたい。

長尾 そいがよか。龍二さんが言うこつならお前の気持ちもちよつとは変わるやろ。

貫一 長尾は余裕でよかなあ。

長尾 えっ？

貫一 背も高つし、足もはやか。今日でちや練習試合で盗塁ばふたつも決めてから。

長尾 なんかおいに不満でもあるとね。

貫一 おなごにきゃーきゃー言われてから。よかなあ。走り方も、風ば切るようにして走つともん、そりや格好良かったいなあ。おつはどつちか言うど風ば受けとめるもんな。

正嗣 貫一、そいがお前によかとこやつか。

貫一 慰めてもらわんでもよかです。

千夏 兄ちゃん、みつともなか！もうやめんね！

千夏が投球練習の格好をする。

千夏 よろし、うちはこいから投球練習ば毎日百球すつけん。

正嗣 妹んほうがよつぽど頼もしかあ。貫一、お前も頑張らんと。

貫一、無言。

徳多が境に話しかける。

徳多 そいで、繁吉、そこん人は何の用ね？

繁吉 ああ、えーつと

境 (余裕をもって)申し遅れました…境、と申します。

徳多 (ゆっくり)さかい…？

境 三池芳組の広報誌の編集を任されておりまして、今日は龍二さんに会って取材のお願いを。

徳多 ……そげんか。おつはてつきり会社んもんかと思つてな。こりや失礼。

境 いえいえ。

長尾が龍二を見つけ、

長尾 あっ龍二さくん……

正嗣 おう(帰ってきたか)。

長男 お帰りなさい、龍二さん、みんな、集まったりしますよ。

男たち、龍二のほうを見ている。

が龍二はなにやら羽のようなものをつけ、手を広げボタンボタンさせながら現れる。そのいでたちもまた特徴的なものがある。

正嗣 あ？なんや？

龍二 (鳴き声)両翼80メートルの翼を広げ、マッハ1.5(時速約1800キロ)の速さで空を飛ぶ。熊本はく阿蘇山の麓より現れて、九州上空一帯を超音速で駆けめぐる。そんな空の大怪獣とは一体何者なのか？……そう、正体は、空の大怪獣くラドン。これは「古代の翼を持つ竜」と書いて古代・翼・竜、プテラノドン、核実験による地殻の変動で巨大化してしまった怪獣だ。

長尾 龍二さん、一体何ですか、それ？

龍二 バカヤロー、空の大怪獣ラドンで言いよるやろ！

正嗣 そいがよう分からん。

徳多 ああ。

龍二 子供たちに今日見せた映画たい。東宝が初めて作った総天然色怪獣映画ぞ。

長尾 総天然色……？

正嗣 カラー映画ってこつか？

長尾 色のついとるとですか？

龍二 公民館にな、4メートル四方のスクリーンば、ばーんって張ってな、16ミリの映画機で映すとたい。こいがけっこう迫力のあつとたい。

徳多 (微笑んで)子供たちは喜んでやるな。

龍二 ああ、ぎゃーぎゃー言いよった。

千夏 なんかうちも見たかったな。

龍二 今度あつ時は見に来てよかぞ。

千夏 うん。あつ兄ちゃん！

龍二が貫一に目をやる。貫一がバナナを食べている。

龍二 で、なんで貫一の落ち込んだるとか。

繁吉 えっ

龍二 その食べ方は落ち込んだるとか。

みんな、貫一に注目。

徳多 おいには違いの分からんなあ…。

龍二と千夏以外はうなづく。

龍二 貫一、お前、坑内がえすうなったつか？

貫一 えっ？…はい。

龍二 ちよっとこっち来てみらんかい？

貫一 なんです？

龍二と貫一が遠くを見やる。境は慌てて移動する。

この頃には夕暮れになっている。

龍二 こっから何が見える？

貫一 四つ山の社宅ですか？

龍二 そんな？

貫一 夕暮れ、夕焼けの空…。

龍二 ああ。なんで炭鉱地帯やのにポタ山の、ここにはなかと思うや？

貫一 ポタ山…？

徳多は知っている様子。

龍二 もともとここじゃポタはあんまり出らんたい。三池の炭はな純度の高かけん、出るカスの少なかとやんな。おつたちはもう過去の争いのことは忘れて、この地で採れる大切な炭のために体ば動かしていかんとでけん。働く時は働く。そいが気持ちよか。会社が何言ってきたもな。月30トン掘れって言ったら掘ってやろうやないか。この地下深くに眠る真つ黒な炭をな。

貫一 …また下るとがえすかかです。キャップランプひとつで真つ暗な中、行くとが。

龍二 貫一、お前、堅坑やぐらの巻き上げ機の音聞いたことあるや。

貫一 いや…。

龍二 キリキリキリ、キリキリキリ…って巻き上げる音のしてな、炭ば外に出す時、こんな音聞いてな、こりやフィルムの回る音と一緒に思うたったい。おつたちがまるで映画の中にいるように思えてな。(目を閉じて)キリキリキリ、キリキリキリ…

貫一 龍二さんは何が言いたかですか。

龍二 まだ見ぬ景色があるとやなかか。あげん暑くて暗くてほこりだらけの穴ん中に入ると思うと嫌になるたい。ばってん、心の持ちようひとつたい。ようく考えて答えば出さんか。でほんなこつやめるつちゆうなら、あとはお前の好きにしたらよか。金の心配はせんでよか。おつがどこさんかから工面してくるけん。

貫一 龍二さん…

貫一、泣いているように見える。が、やはり食べている。

貫一（口に物を含んだまま）ゆーいひゃん！にやひゃにやまひひおあいほほおわいわす

千夏 龍二さん、バナナの差し入れありがとうございますすごいですって。

龍二 そ、そうか。

貫一、一礼して去る。千夏もついていく。

千夏 もう兄ちゃんちよっと待たんね。

少し間。

繁吉 なんで貫一の怖がって分かったのですか？

龍二 ああ、目ば見りや分かるたい。トクさんやおっは、坑内でふと襲ってくる言いようのない怖さに耐え切れんでやめていく者ば何人も見てきた。

長尾 ならやっぱ辰夫さんもそうやったのですか。

正嗣 ……おい、辰夫ん話はやめんか。

長尾 あつすんません。

龍二 よかよ。あいつは逃げたんじゃなか。考えのあつてあつちに行つた

長尾 はあ。

龍二 ……。

徳多 まつとにかく、貫一は大丈夫たい。大丈夫やけん、大丈夫て思うたけん、おっはひどかことば言った、言ってもくじけんかった。

繁吉 ありやほんなこつひどかですよ。

徳多 わざとたい。

正嗣 そうは思えんやったばってんな。

徳多 繁吉、あとで貫一も誘って飲み行くばい。

繁吉 はい。…あつそうだ、龍二さん、お客さんの来とらすです。

龍二 ン？

境が挨拶もなしに映画の話をする。

境 しかし、さっきのなんですけどね、あの炭鉱の場面は私、納得がいかないんですよ。

周りのみんなは「はっ？」という空気。

龍二 どの誰か？

繁吉 あれ？

周りが警戒する。

龍二 そいで？

境 いえね、あの映画、炭鉱が舞台になってるでしょ？

龍二 ラドンば観とったいな。

境 変なのは、古代トンボの幼虫メガヌロンが坑内に現れて、それをやつつけるために、あれ何て言うんですかね、こう石炭を運ぶやつ

龍二 炭車たい。

境 そう、それを切り離してぶつけようと思いますよね。銃も使ってる。あれ危ないんじゃないのかなあって思ったんですよ。だって、そのへんに引火して爆発しちゃいませんか？

龍二 うん、間違いじゃなか。

境 やっぱりそうでしょ！じゃああれは「何てことすんだ、危ない」って感じなんですね。

龍二 まあ、映画やけんな。

境 そっかあ。

龍二 …で、あんたは誰ね？見かけん顔やね。

繁吉 龍二さんに取材らしかです。

境 組合のですね、今後の展開についてのお考えをお聞きしたかったものですから。

龍二 おつはそげんかと苦手やけん、トクさんに聞いてくれんか。

境 近々、復帰されるといことなんで、ぜひそのことについてお話を

龍二 断る。あいは死人まで出した大きか事件たい、軽はずみなことは何も言えん。

境 じゃあまた伺わせてもらいますんで、気が向いたらお願いします。

龍二 ああ気が向いたらな。

境 …では今日はこのへんで。

境、去る。徳多が気になる。

龍二 …よし、みんな、今からな、釣に行くばい。

数人 釣？

正嗣 こげん遅くにや。

龍二 ああ、のぶば港に置いてきてしもうたったい。あいつ、釣り始めたら、台風が来ても動かんやつやけん、行って連れ戻してこないけん。(独り言)奥に釣竿の何本かあつたて思うたばってんなあ。

龍二は一度奥へ去る。

繁吉 じゃあ、先行つといてください。

長尾 何しに帰ると？

繁吉 (楽しそうに)そいは言われん、秘密たい。

繁吉が出ようとすると、そこに辰夫が立っている。

辰夫 よう元気か、繁吉。
繁吉 ……た、辰夫さん！
正嗣 (心配して)辰夫、お前、何しに来たとか。
辰夫 ああ、ちよっと用のあつて。

徳多が辰夫に近寄って、

辰夫 トクさん、久しぶりです。
徳多 ああ、元気でやっとなるか？
辰夫 はい。
徳多 ならこげんかどこに来たらいかん。
辰夫 分かつとります。龍二くんは？
徳多 おるばつてん。

辰夫、中へ。

釣竿、何本か持つ龍二が出てくる。

龍二 おい長尾、ちよつとそのへんでミミズば土ん中からほじくり出してからくさ…

龍二と辰夫、目が合う。

龍二 おう…いきなりなんや
辰夫 釣りね？今の時間やったら、港から船の出たあとんほう釣りがすかよ。
龍二 港で釣るては言うたらんばい。
辰夫 そうね、いつもの場所かと思うたけん。

少し間。

辰夫 こいば。

辰夫がレコードを渡す。

龍二 こげんかともういらん。
辰夫 ばつてん龍二くんの欲しかつて言いよつたけん。
龍二 裏切りもんのお前に頼んだんじゃなか。
徳多 龍二(やめとけ)。
辰夫 とにかく置いとくけん。

少し間。

辰夫 じゃあ(去ろうとする)。
龍二 おい辰夫。

辰夫、足を止める。

龍二 どの面下げてここん来た？今度のこのこ来やがったらおっはお前ば殴るけんな。
辰夫 おっがしたことは、そげん許せんことね。

龍二 当たり前たい。

辰夫 そいはおかしゆうなか？一緒に学校も出て、一緒に働き出した者がなんで？

龍二 せんか腑抜けたこと言いよるけんきさんはつまらんとたい。いい加減な気持ちであ
ん闘いばしたとやなか。おったちの権利ば命張って守ろうとしたとやなかか。

辰夫 ばってん、血を見るような闘いばしてまで、やらないかんことね。

龍二 (バカにした笑い)話にならん。さつきと帰れ！やつはお前はヤジロベーたい。ふら
ふらふらふら、ヤジロベーの辰夫ちやよう言ったもんたい。

辰夫 (少し怒って)龍二くん。

龍二 怒ったか？

辰夫 えっ。

龍二 もっとちゃんと怒らんか。情けなかな。…もう二度とここには来んなぞ。

龍二、出ていく。

龍二(声) 長尾、裏ん山行つてミミズばとつてこい。

長尾(声) あっ龍二さん、もう寒かけん、見つかるかどうか…。

正嗣 辰夫

辰夫 ……

正嗣 もう何もしてやれんばってん、向こうでうまくやれよ。

辰夫 マサさん。

正嗣 もうじきまたおったちも炭掘る仲間たい。ハハハハ。じゃあな。

正嗣、去る。辰夫と徳多のふたり。

辰夫 すんません、お邪魔しました。

徳多 辰夫

辰夫 はい

徳多 もう一度戻ってくる気はなかか？

辰夫 ……すんません。

辰夫去る。

場面4 昭和三十五年（一九六〇年）十二月〈久しぶりの坑内〉

徳多 1960年東の安保、西の三池と言われた闘争も、あれだけ国民の熱を帯びながら、意外にも海の潮がさつと引くように終わっていった。三池で働いた炭鉱マンたちの多くは、自主退職という名の解雇によって職を失った。この地を去らねばならない者も大勢いた。幸か不幸かわしや龍二は、そのまま残り、またあの有明の海の底、深い深い闇の向こうへともぐることになった。

龍二 たちは人車に乗って坑内に下る

龍二、徳多、繁吉、正嗣、貫一、長尾ら、坑内作業の様子。

繁吉 龍二さん。

龍二 ん？

繁吉 今日は会社の幹部職員が見回りに来るっちゅう話です。

龍二 ほんなこつか。邪魔になってしよんなかなあ。

徳多 現場は危なち言うとったんやけどな。

龍二 担当の変わって伝わっとらんのやろう。

繁吉 前もそげんかことのあるりよったとですか？

龍二 ああ。出炭量ば上げないかんちゅうては、わざわざ上の奴らが現場視察に来よつたな。

大払いのエピソード。大払いとは採炭切り羽での落盤のことを意味する。

徳多 繁吉、あんま来んほうがよかてあいつらに伝えて来んか。

繁吉 ばってん、もうそこまで来とりますよ。

徳多 よかけん言ってこい。

繁吉 はい。

繁吉が出ていく。

龍二 トクさんは用心深かとやね。

徳多 お前は大ケガしたこつがなかるうが。

龍二 ああ、おっは危なち目に合わん星の元に生まれたごた。

徳多 なんち言うか、坑内は危険か。いつも死と隣合わせたい。ばってん、死ぬほうがまーだよか。中途半端にケガすると、ずーっと苦しみのたうちまわらんといけん。そいが辛か。

龍二 すぐに上げてくれんとね？

徳多 人車の運行ダイヤが決まっとる言うてな。

繁吉がえらそうな幹部職員の葉山を連れてやってくる。

繁吉 はい、こっちです。こっち。ここがですね、炭層幅百メートルの切り羽です。
徳多 (龍二に) 来なはったごたな。
龍二 たいそうな大名行列やな。
葉山(声) ああ、君たちはいいいから休んでくれたまえ。ふっ…何も心配はいらんよ。
それです、こっち側がドラムカッターと言って炭ば掘り出す機械です。で、その炭を運んでいくコンベヤーがあれですね。

葉山が現れる。

葉山 なるほど採炭量が伸びているのも、オートメーション化に秘密があるわけか。

龍二 (葉山をバカにして) あいつ、ちっとも分かつたらん。

徳多 人がおらな機械も動かんやろうが。

龍二 よう壊るとばってん、機械工の優秀やけん、すぐ直るっちゃななか。

葉山 (話を聞いて咳払いひとつ) 別に私は人がいらなと言ったわけじゃない。…しかし、さすがに坑内は暑いな。

繁吉 採炭現場は暑かでしょ。30℃は楽にありますけん。

龍二 おい、繁吉。

繁吉 はい？

繁吉が龍二のところに来る。

繁吉 (調子づいているので元気良く) 何ですか？

龍二、繁吉を殴る。

龍二 説明はよかけんさつさと仕事に戻らんか。

繁吉 あの人、まだ東京の本社から来たばかりで、このことあまり知らないって言うんで、それで

龍二 よかけん、ほっとけ。

繁吉、しぶしぶ仕事に戻ろうとすると、

葉山が龍二と徳多に近づいてくる。

葉山 君たちは何をしているのかね？

ふたりとも気持ちいいほどに無視。

葉山 聞こえてるんだろ。答えないか！

繁吉 (気を使って) ああ、あのですね、こっちは岸岡龍二さん、5、6年働かれてるおっの先輩です。。で、徳多さん、もう先山としてベテラン中のベテラン、会社から「弘長」ば任されておらるつとです。

葉山 「弘長」って言ったたら、鉦員側の責任者だな。

龍二 いらんこと言わんでよか。

繁吉 はく…。

徳多 現場に近づくと危なかばい。

龍二 ぼさーってしとつたら岩の降ってきてぐしゃってなるばい。

葉山 君たち、口を慎みたまえ。私は九州帝大工学部採鉦学科で炭鉦の研究をしてきた。

三池炭鉦の地質は分かっているつもりだが。

龍二 すぐこればい。

葉山 何がだ。

龍二 あんたらエリートは理屈っぽか。

葉山 私は坑内に入って調査をしたことだっただけである。現に今こうやって自ら視察を希望してやってきたんだ。

突然「ピンツ！」と音がする。「ん？」龍二と徳多だけが気づく。

葉山 君たちのほうこそ会社の人間だというだけで態度を決め、

龍二 トクさん。今の。

徳多 ああ。たぶん、そうだ。…全員、避難準備！

葉山 (思わず) えっナニ？

龍二 おい！作業やめろ！繁吉、コンベアーば止めろ！

徳多 さあて、どげんかの。

葉山 一体どうした？見たところ落盤するような岩ではなさそうだが…。

徳多 さっきの音が聞こえんつちゅうと、プロとは言えんな。

葉山 音？

龍二 (葉山に) 「太鼓打ち」つちゅう岩盤の音たい。

葉山 太鼓打ち…

徳多が落盤疑わしき場所へ近づく。次の瞬間「ゴロツ！ゴロゴロ」と雷のような音が、岩の中からかすかに聞こえてくる。

徳多 (表情厳しく) 避難ばい。(大声で) 全員、この場から離れろー！

葉山 おい、まさか、こんな広い場所で岩が崩れるというのか。

龍二 広いから崩れるったい。どっから崩れてもおかしゅうなか。

葉山 (驚き) えー？まずいぞ、よりによって視察中に。おい、一体どっちへ逃げたらいい？
龍二 ついてこんね、遅れたら死ぬばい。

慌ただしくみんな去る。うまく舞台を使って逃げる。気づくと葉山がいない。

龍二 おい、あんメガネがおらん！

徳多 こら、いかんばい！

龍二 ああもう、どこ行ったつか！

徳多 龍二、危なか！

龍二 よか、ひとつ走り行っつく(る)。

徳多 ばってん。

龍二 大丈夫、おっには山の神さんのついとるけん。

龍二、走ってさっきいた切り羽に戻る。葉山がメガネがないと間抜けな格好で探している。イメージとしては「のび太くん」。「横山やすし」でも可。

葉山 ないないない・・・。

龍二 そげんどこでなんばしよつとか！

葉山 あれ？メガネ？おかしいな？

龍二 メガネは換えのあつけど、命は換えられんばい。行くばい。

龍二、葉山を強引に背負って逃げる。はつきりと「ゴロツ！」と鳴る。

龍二 やばかー！ー！。ぎりぎりたー！ー！ー！。

龍二、葉山をかばいながらその場に倒れる。

ドスッーんと鈍い落盤の音が響き渡る。

徳多たちが恐る恐る集まる。

徳多 大丈夫か、龍二。

龍二、明るく起きあがる。葉山は、あまりの恐怖で腰が抜けている。

龍二 あー、山の神さんの助けてくれなはった。

葉山 助かった、はあはあはあ。良かった、はあはあはあ。・・・あつ、血が出てる！痛い、

痛い！

龍二 かすり傷でよかったたい。

葉山 しかし、本当に落ちてくるとは・・・。

徳多 あんたらが研究したちゆう坑道は崩れんようにしつかりと木枠の組まれとるところたい。ばってん、ここは少しづつ掘り進めていく切り羽たい。一歩間違えたら死を招く現場たい。

葉山 おい、救護隊を呼べ。

龍二 大袈裟やな。おい、こん人ば。

繁吉たちが返事をして葉山を運ぶ。

葉山 おい、何をする！
貫一 また岩の落ちてくるかもしれないです。
葉山 こんな格好で上にあがるわけないだろ。離せ、おい、離せー！。

など言いながら葉山、退場。

龍二 なあ、トクさん…

徳多 うん。龍二も分かっとったつか。

龍二 危なか現場にやらさるっては噂のあつたばってん、ほんなこつやることの露骨か。

徳多 それだけじゃなか。ずいぶん切り羽も汚くなつとる。

龍二 こういうホコリんごたつとは溜まつたらまずかつちやなかと？

徳多 ああ危なか。炭塵は火がつくと連鎖して広がるけんな。

お昼を告げるベル。

龍二 おっ？もう昼か？

徳多 昼からはこん片付きたい。

徳多、去る。入れ替わりに境が炭鉱マンの格好をして出てくる。

境 お疲れさんです。

龍二 ああ、お疲れさん。

境 あら、派手に崩れたようですね。

龍二 …ちよつと待たんか。

龍二が気づく。境、足を止める。

龍二 おい、なんでお前がいるとか？坑内に。

境 あらあく？ばれた？

龍二 どっから入ったつか。

境 (きよろきよろする)

龍二 やめれ、ああ、やめんか。まぶしかろうが。

境 ん？え？(ライトを当てる)

龍二 (反応)うお。

境 実際、坑内ってどうなってるのか見てみたかったんです。けど、許可が全く出ません
でした。

龍二 当たり前たい。

境 なので、こっそり来てみました。

龍二 そいが分からん。

場面5／昭和三十六年（一九六一年）3月〈別れと出会い〉

徳多が繁吉に話をしている。

繁吉 紙芝居屋、ですか？

徳多 ああ。おったちが紙芝居ば見せてやっとなたい。子供たちの喜ぶ顔ば見となかや？
繁吉 まあそりや…。

徳多 普通、相場は5円たい。そいば2円にする考えたい。

繁吉 (関心して)はー偉かですねー。

徳多 やろ。

繁吉 そいやったら子供たちも喜びます。

徳多 そいで水飴ばつけて20円で売るつたい。ぼろ儲けたい。

繁吉 やっぱりそげんですか。

徳多 よかけんやるとたい。

繁吉 (ゆっくり)あー、ダメつすよ、おいは。

徳多 なしてか？

繁吉 いや、そいは…。(口ごもる)。とにかく忙しかとです。

徳多 …写真ば撮るとにか？

繁吉 えっ…トクさん、知つとつたとですか。

徳多 ああ。

繁吉 実はいには訳のあつてですな…

徳多 ききとうなか。

徳多は奥のほうに。繁吉「トクさん？」

そこへ玄関から声。

梓(声) すみませーん、どなかいらつしやいますか？すみませーん。

繁吉 (気を取り直し)あっ…はーい。

繁吉が玄関のほうを覗く。

梓が庭のほうに回って現れる。

梓 こんにちは。

繁吉 はい…

梓 突然お邪魔してすみません、木下と申しますが。

繁吉 はあ…。何か？

梓 父がこちらに来てると聞いたもので。

繁吉 はっ？

梓 …木下梓と言います。

繁吉 あっちよっとお待ちください。

繁吉は徳多のところへ戻り、

繁吉 あつトクさん、

徳多 ん？

繁吉 なんかですね…龍二さんの娘さんの来とらすです。

徳多 (驚く)はあ！

繁吉 龍二さんの。

徳多 ほんなこつか。…あいつどこで子供ば作っとったつか。

ふたり、恐る恐る玄関のほうへ。

徳多、梓と目が合う。

梓 あつ。

間。徳多の表情が緩む。

徳多 お前さんかあ…よう、帰ってきたなあ…。

梓 (笑顔)ただいま、おじさん。

繁吉 おじさん？龍二さんが父親で、トクさんがおじさん？(混乱する)

徳多 違うたい。

繁吉 はあ？

徳多 分からんとか…マサん娘たい。

繁吉 (表情明るくなり)ああ、マサさんの？

梓 初めまして。突然すみません。

繁吉 いや。

徳多 マサ、家におらんやったね？

梓 あつ駅でのぶさんに会ったら、たぶん今日は龍二さんの家で飲んでるやろうって。

徳多 のぶの駅におったつか。あいつは何ばしよつとやろ。

繁吉 …今、マサさんたち飲み行つとります。おつも今から行こうて思うとつたとです。

梓 そうですかあ。

そこへ龍二たち酔っぱらいの歌声。

繁吉 あつ帰ってきたごたです！

徳多 …ちよつと隠れとつて、おどかしてやらんか。

梓 ええ？でも…。

徳多 よかけん。ほら(奥へ)…繁吉、知らんふりぞ、よかか。

繁吉 あつはい。

徳多と梓は部屋の中へ。繁吉、慌てて梓のくつを隠す
酔っぱらいの龍二、正嗣、貫一、長尾が入ってくる。

龍二 おう、繁吉。

繁吉 (不自然に) はい、繁吉でございます。

龍二 なんか、そいは。

繁吉 あっいや。

龍二 ン、お前何か隠しような？

繁吉 何もなかですよ。

龍二 奈津子となんかあったとじゃなかろうな。

繁吉 なんて奈津子が出てくるとですか。

龍二 お前好いとるけんたい。のぶの嫁やのに。

龍二、周りに話をふり笑う。周りも酔いついでに反応する。

貫一 ばってん、龍二さん、今日は酔いすぎやなかですか？

長尾 ああ、なんかあったとですか？

龍二 なんもなか。別になんも…

正嗣 いやいつもとは違うばい今日は。

龍二 今日はキヨさんのな…キヨさんとな…

正嗣 キヨさんの死んだとは29日やけん、あと一週間あるしな。

貫一 (繁吉に) なら何の日ですか？

繁吉 わからん。

龍二 おつがキヨさんとふたりで飲んだ日たい。

龍二、よろよると立ち上がる。

龍二 去年ん今頃は、争議のまった中やったとです。流血の騒ぎになった三川鉦の事件の翌日、キヨさんは暴力団のひとりに刺され死にました。あん日のことをおっは一生忘れんと思います。一緒に闘ったおったちが忘れたら罰があたるとです。

龍二、酔いがまわりながらも、何やらみんなに合図している。

龍二 …よしキヨさんと一緒に歌うばい。

繁吉 何の歌ば？

組合歌『炭掘る仲間』が演奏、合唱される。出演者全員のアンサンブル。
メンバーが加わり、争議の際に歌った労働者たちの姿を想起させる。

みんなが歌っている中、龍二が昨年のことを思い出す。
風の音、三池争議の人々の声が遠くに聞こえる。

龍二、今まで酔っぱらっていたのが嘘のように語りだす。

龍二 ちようどそんな日は、警察が二日連続の流血騒ぎば恐れて「武装解除」ば言ってきたんで、そいに守っておったちは丸腰やったとです。：おっはピケ隊の最前列にいて、キヨさんはおっのすぐ後ろにいました。

フィルムがまわるような音。再現場面。

トラックやハイヤーの音がする。

龍二 夕方、トラックやらハイヤーで暴力団が続々とヤマ元に入ってきたよりました。南門には暴力取り締まりの検問所もあったばってん、もうおかまいなしですたい。おかしな話ばってん、暴力団は当たり前前んごとして凶器ば持って、おったちのいる正面前にやって来たとです。車ん上でツルハシやら日本刀ば振りかざして「お前ん顔はよーっと覚えたけんなあ」「会社より金ば出しきるならあんたらの味方ばしてもよかばい」など叫びよりました。：嫌な予感がして、おそろしゅうなりました。前の日の事件で、街中、狂ったごと興奮状態になつとたですけん。：ばってん、キヨさんは物怖じひとつせんでどんと構えとりました。：動きのあつたとは、向こうのひとりが車から降りて、組合の責任者たちと話を始めた時でした。次の瞬間、裏をかいて20人以上の男がだあーつと車から降りてきて、襲いかかつてきたとです。話し合えばしよると思つてこつちが油断しとつた時です。こつちは丸腰、「こりややばか」つちゅう予感がしました。一気に襲われ、おりもさすがに鉄の棒でど突かれて、ひとたまりもありませんでした。：なんとか意識は失わなんやつたばってん、ふらふらで起きあがったら：ちようど：ちようど目に入ってきてしもうたとです。

アイクチが強調される。

龍二 先の鋭かアイクチば持った男が飛び出てきて、キヨさんの胸にそいば刺しよつたとです。

何か鋭い心につんざくようなME音が二度。

龍二 二度も刺しよつた：。殴り合いで辺りが混乱しとる中で、キヨさんは地面に倒れました。血に染まるキヨさんば、病院へ運ぼうとしたばってん、もうダメやった。四ツ山の坂ば下る途中ですでに息ばしよらんやつた。「仲間の死」ちゅうとがこげん辛かては思わんやつたです。今でん後悔の気持ちでいっばいになります。なんであん時、おっが見上げた、すぐその先の悲劇ば防げんやつたかて。手ば出せんやつたかちゅうて。おっが！：もつとはよ気づいて手ば出せとつたら、何かが変わったかもしれんやつたとです。何かが。

フィルムがゆっくり止まる音。

龍二 キヨさん：すまんやった：。

正嗣 龍二、そげん自分ば責めんな。みんな一所懸命闘いよつたとやけん。

長尾 ばってん、おっは許せん。職員や第二の奴らが暴力団にどんどん武器ば与えとつたとですよ。

貫一 そうたい！おっの父親もそいでえらいケガばおつた。

正嗣 ばってん、おつたちの中で石ば投げて向こうば挑発した者がおつたのも確かたい。

貫一 マサさん、どっちの味方なんですか。

正嗣 うんにや、第二のやつでん、キヨさんの死ば哀しんだ者もおる。

貫一 えらい奴らん肩ば持つじゃなかですか。

正嗣 なんて？

長尾 そうばい、マサさん。第二の連中は信用でけん。

繁吉 そつより文句ば言うとは会社と警察たい。

龍二、うつむき顔でいる。徳多が出てくる。

徳多 お前たち、もうやめんか！

繁吉 あつ。

正嗣 トクさん、おつたとね。

徳多 誰が悪かち言い合つても、もう清志郎は帰つてこん。龍二の気持ちにもなつてやらんか。大切な仲間ば失えばそいだけで哀しかろうが。いつまつでん哀しかろうが。

貫一 ……龍二さん、すんませんでした。

長尾 ……おつもすんません。

正嗣 龍二…

龍二 (気を取り直して)よか。おっこそすまんかったな。…さつ、もう一軒行くばい。

徳多 龍二、ほんなこつ大丈夫とか？

龍二 ああ、今、キヨさんの声が聞こえた。「酒ば飲みながら、また好きな映画ん話ばしようやー」て。キヨさんは「戦艦ポチョムキン」が好きやったもんね。上映会ば開いた時も、こつそりもういっぺん見せてくれーって言うけん、キヨさんだけに見せたこともあつたつたい。

周りからも笑い声がこぼれる。

そこへ梅子が駆け込んでくる「龍ちゃん！龍ちゃん！」
奈津子も追っかけて来た。

梅子 ちよつと、ちよつと聞いてよ、えらいことなつたー

正嗣 なんや慌てて、

奈津子 うちも買物に出ようてしたら、梅子ちゃんにつかまって、

龍二 どげんしたつか？

梅子 あんね、のぶさんにパチンコ屋でばったり会うたったい。そしたらあの女の帰ってきとうって言うけん、びっくりしてそいで、

奈津子 あの女？

繁吉と徳多は気づく。

梅子 マサさんの娘たい。

数人 はっ？

奈津子 梓さんのこと？

梅子 そう。龍ちゃん、いかんけんね、うち以外の女に興味持ったらいかんけんね。

龍二 梅子、お前な。

正嗣 梅子はそげんしてまで、龍二の気ばひきたかとばいね。龍二、このへんで一緒になつてみたらどげんね。

龍二 おい、マサ。

梅子 違う！本当の話やもん。のぶさんから聞いたとやもん。

正嗣 あんな、梓はここにはもう帰ってこん。母親と一緒に出て行つたったい。

繁吉 (試しに)ばつてんマサさん、もし会えるとやつたら、娘に会いとうはなかですか。

正嗣 知らん、そげんかと。

龍二 まつよかたい、梅子、お前ん店飲み行ってやつけん、今から店開けんか。

梓の声我突然聞こえる。

梓 帰ってきたらいかんやつたかな。

周り「ん？」正嗣、耳ほじる。

正嗣と龍二を中心に笑いながら、飲みに出ようとする。

徳多が招き、梓が現れる。近くにいる者は気づく。

梓 …お父ちゃん！

うまく人垣が分かれて、梓が笑顔で立っている。

徳多は微笑んでいる。

正嗣 梓…？

梓 うん…不思議なあ。もう大牟田弁、忘れてるって思ってたけど、お父ちゃんに会うたら自然と出てきた。…ただいま、お父ちゃん。

梅子 やっぱり本当やったたいー。

少し間。

正嗣 いや…(何かに抗う)
徳多 どげんしたマサ。娘の帰ってきたとぞ、明るか顔せんか。

正嗣、梓に背を向け、

正嗣 なんで帰ってきた？
梓 えっ？

正嗣 おっは家族ば守りきらんやったとぞ。お前と母さんに悲しか思えばつかいさせたとぞ。だけんお前たちは出て行ったとやろ。

梓 お母さん…再婚したよ。

正嗣 …そげんか。

梓 送った手紙、読んでない？

正嗣 手紙げな知らんぞ。

繁吉 あれっ一度なんかマサさんに手紙ば届けたことあつたばってん…

正嗣 知らんせんかと。

梓 どうなん、お父ちゃん。

正嗣 んああ…届いとるばってん、読んどらん。

梓 なんで？私、一生懸命書いたよ。

徳多 まあよかたい、帰ってきたばかりやけん、あとはうちに帰って親子水入らずでゆっくり話すとよか。

正嗣 龍二、飲み行くとやったな。

徳多 マサ。

正嗣 おつも一緒行くばい。

梓 お父ちゃん…

正嗣、うつむく。

梓 やっぱり帰ってこんほうが良かった？

徳多 どげんなんか、マサ。

梓 やっぱり私がいたら困るんやね。

正嗣 ああ、ほんなこつ困る。

梓 そっか…。

正嗣 …手紙ば読んだら、会いたくなるやなかか。せんかことはもう絶対出来んて思うとった。おっはもう父親ば一度失敗しとるたい。もう一生独りで生きていこうて心に思うて、今日までやってきた。ばってん…一日でん、お前んことば思い出さん日は…なかつた。考えん日は…なかつた。そいけんなんか…困つとつとたい。こいがお前ん冗談なら頼むけん、今すぐこつからおらんごとなつてくれ。

梓 ううん。

徳多 (振り返り)…よう帰ってきてくれたな。

梓 お父ちゃん……！

正嗣、しっかりと梓を抱きしめる。しばらく間。

梓 あくなっちゃん。

奈津子 梓さん。

梓 昔、よう遊んだねー。今なんばしよつとー？

奈津子 うん……

徳多 こい(奈津子)、のぶと結婚したとぞ。

梓 えーそやったとー。

奈津子 ばってんあん人、いっつも帰ってこんとよ。

みんな、口々にのぶのことを話す。そして梓、みんなを見る。

梓 (みなさん)木下梓です。さつき、帰ってきました。ただいま。

拍手で迎えるみんな。

徳多 長旅で疲れたろうけん、今日んところはうち帰ってゆつくりせんね。

梓 はい。

徳多 ほら、マサ、何照れとうとか。自分の娘やろが。

正嗣 んん。

繁吉 そうだ、今日ん夜でもお祝いばしませんか？ねっ？ねっ？

貫一 そいよかねー。

長尾 賛成。

梅子 うちん店はお断りよ。

繁吉 そげん言わんでからくさ。

梓 梅子ちゃん、元気？頑張りよるみたいやね。

梅子 ふん、頑張らんと生きていけんけんねー。

繁吉 じゃあ、夜もういっぺんここに集まるとういことと、龍二さん、そいでよかですな。

龍二 (ぼそつと)……みんな、おっと飲み行くんやなかつと。

繁吉 えっ？……あーすんません、龍二さん、こっちんほうのが楽しくなりそうですけん

龍二、繁吉を殴る。そして、梓のほうへと近づく。周りは緊張。

龍二 よう。

梓 龍二さん、お久しぶりです。

龍二 (ああ)あんなあ……！

龍二の態度に周りは緊張する。

徳多 おい、誰か止めんか。
龍二 お前
数人 ああ！
龍二 かわゆるくなったなあ。

「ええ？」周り、調子が狂う。

龍二 前と全然違うやつか。昔は髪も男んごつしとつたし。
梓 あーそうだったー？

龍二 東京に行くときげんになるとね。オードリーたい。ヘプバーンたい。
徳多 龍二の言いよることがいっちょんわからん。

梅子 龍ちゃん、うちん相手ばして、

龍二 今から飲みいきたい。(梓に)お前も一緒来んか。なんならふたりで行こうか。

徳多 やばか、龍二の口説き出した、長尾、貫一、引き離さんか。繁吉もぼさーつちすんな。

梅子 今日休みば取るけんどつか行こう！

龍二 うるさかな(梅子を無視)：・国鉄で帰ってきたとやろ、ここまで何時間ぐらい

貫一 はい、お話し中すみません。

徳多、繁吉、長尾、貫一は龍二を梓から引き離す。

龍二 おい、なんばすつとか。

繁吉 じゃ、また夜集まりましよ。お疲れさんでした。

龍二 マサ、今から梓ば借りるけん、おい邪魔すんな：・やめれ離さんか、こら離さんか。

龍二、貫一たちに連れられて去る。

梓は正嗣と一緒にうちへ。

場面6／昭和三十六年(一九六一年)八月<坑内事故>

坑内。うだるような暑さの中で仕事をしている。

何組かの炭鉋マンが鉄柱を運び通り過ぎていく。

繁吉、徳多、貫一がひと仕事終えて休憩に入る。繁吉が何か捜し始めた。

繁吉 あれ？ここ入れとつたばってんなあ。おかしかなあ。落としたとかいな。

貫一 どげんかしました？

繁吉 ああ、おっの小銭入れのなかったい。

貫一 落としたつちやなかですか。

徳多 残念やったな。坑内で落としもんばしたら、拾ったやつのもんになるけんまず返ってこんぞ。

繁吉 えっ!?

徳多 昔からそうやけんしょんなか。

繁吉 せっかく奈津子の作ってくれたとに。

徳多 もしかして繁吉の言いよつとは、こげんか袋んごたつつか?

繁吉 ああ!…そい、おっのじゃなかですか!

徳多 なん言いよるか。さっきのぶが来て、「やるく」てくれたったい。おっのもんたい。

繁吉 ううううう。今度ばかいはトクさんと言えど納得出来ん。

徳多 なん? やるとか。坑内でケンカばしたらどげんなるか知つてのことやろな。

繁吉 わかつとります。首になつとは覚悟ん上です! 行きます!

ふたり、体をこすり合う。見るも滑稽な姿である。

そこになぜか貫一も。止めに入っているつもりである。

みんな、むむむむむである。

そこへ龍二が通り過ぎようとする。

徳多 おつ、龍二、どこ行くとか?

こすり合い止まる。

龍二 人車のもうすぐ上がるげな。腹ん痛かあちゆうて上げてもらうと。

徳多 さぼるんか。働かんと金にならんぞ。

龍二 こげん金にならん場所にやらさるんなら一緒たい。ということ、(林家三平を真似て)どくもすみません

繁吉 あつ龍二さん

龍二 ん?

繁吉 ならおつも上がります。トクさんのひどかけんいっちょん仕事に身の入らん。

徳多 なんやおつのせいにしてから。ほら、返してやったい。

繁吉すねながら小銭入れを徳多から奪い返す。

と、そこへ辰夫が現れる。

貫一 あつ。

徳多 辰夫…

辰夫 みんな、元気しとったね?…たまたま現場の近かつたけん。

龍二、辰夫を見る。

辰夫 よう。

龍二 何しにきた？きさんらはもつと条件のよか現場やなかとか。近か遠かじゃなか、安
全か危険かん違いたい。こげな現場で出炭量ばあげれ言われたっちや無理のあつたいな。

辰夫 …こいば拾ったとつたとばつてん、こい龍二くんのやなか？

龍二 (見て)…知らん。

辰夫 ばつてん、こん曲はおつが前にやったもんやけん。

龍二 知らんて言うたら知らんたい。

辰夫 まさか坑内に捨てたっちやなかかて思うて、

龍二 (ささぎって)大体、ここはお前らの来るとこじゃなからうが。

辰夫 ここらあたりは割り当てらる人数も少なかけん、加勢ばしに來たとばつてん。

龍二 そんならいらん世話たい。來んでよか。

辰夫 龍二くんの邪魔はせんよ。あつちのほうば手伝うけん。

龍二 辰夫、そいは偽善っちゆうとぞ。

辰夫 偽善？おつは組合の違けんちゆうて言うて変な線ば引きとなかだけたい。

龍二 初めに切り崩しば狙ったんはきさんらのほうじゃなかか。

辰夫 いったん話ばしよると。同じ仕事ばしよつとに、なしてあつちとこつちでいがみあわ
んといけん。

龍二 ほう、おつには、いっちょん第二は悪うなかつたつて言いよること聞こえてしよん
なか。

辰夫 そうは言うたらんよ、お互い考えば認め合わんと家族兄弟がこげんかことではらば
らになつたらいかんと思うとよ、おつは。

龍二 かつこよか正義たいな。

辰夫 おつは真劍に言いよるとよ。

龍二 おつもいつも真劍たい。

徳多が割つて入る。

徳多 なら、こいは龍二ん代わりにおつがもろうとこ。

龍二 トクさん。

徳多 よかな、辰夫。

辰夫 まあ。

辰夫、徳多に1枚のレコードを渡す。

徳多 辰夫…先山として意見してもよかか。

辰夫 (緊張しつっ)はい、そいは。

徳多 うん…あつちの炭車の運搬作業が遅れとるごた。手伝つてもらつてもよかか。

辰夫 トクさん。

徳多 うん。

辰夫 分かりました。

辰夫、去る。龍二も腑に落ちないまま。

龍二 繁吉、貫一、あそこの発破作業ばすつぞ。

繁吉 あれ？上あがるとやなかったとですか。

龍二 気が変わったったたい。ダイナマイトの穴ば空けんか。はよせんかつ！

繁吉、貫一、返事をして去る。龍二も徳多の視線を気にしつつ去る。

徳多は、龍二が決して辰夫を憎んでいないことを知る。

そこへ炭鉱マンの格好をした境が出てくる。

境 お勤めご苦労様です。

徳多 あんたか。

境 繁吉くんはこっち来ませんでしたか。

徳多 今日は見かけとらんなあ。

境 そうですか。

境が去ろうとすると、

徳多 何に使いよつとね。

境 えっ？

徳多 あんたがいつも撮りよるもんたい。

境 ああ、写真(ですか)。ですから、組合の情報をですね、

徳多 向こうに渡しよつとじゃなからうかて思うてな。

少し間。

境 えっ？

徳多 あんた、前に新聞記者ばやりよつたとばいね。ヤマ記者。

境 ああ、ご存知だったんですか。

徳多 思い出したったたい。どっかで会ったことのあつたばってんなあて考えよつたら、そうたい、会社に入りましたことのもご存知ですよね。

境 では、もうやめたということのあつたちゃななか。

境 いやあ大変でした。炭鉱マンが解雇されて、その悲痛な叫びを記事にすればあなた方は喜んでくれますがそれを良しとしない人たちもいる。反対に会社のことをよく書けば、あなた方からは抗議の電話を受ける。板ばさみの状態に耐えきれなくなつたんでしょいかねえ。私は今のようにな、自分だけで自由にものが書けるほうが性に合つてたんです、きつと。

徳多 知らん間に繁吉の悪者になつたりせんやろな。

境 悪者ってどういうことですか。

徳多 おっの仲間ば傷つけるような真似ばしたらおっはお前さんば許さんけんな。
境 いやだなあ、そんなことはありませんよ。
徳多 そげんね、ならよかばってん。

その時、奥で重たい鉄柱が崩れた音。嫌な予感。

長尾の声「た、大変ばーい」

龍二、正嗣、繁吉、貫一が何事かと現れる。

そこへ長尾が真っ青な顔をして出てくる。

長尾 トクさん：：龍二さん：：

徳多 どげんした？

長尾 おっが手ば滑らしてしもうた：：。ああ、ああく！

徳多たちがその奥を見る。

全員、一瞬、息をのむ。

繁吉 あーっ！

龍二 辰夫！

慌てて辰夫のところへ行く。境は一度消えてカメラの準備。

ほぼ同時に、辰夫も転がりこんでくる感じ。

辰夫 (うめく)いてく：：。

正嗣 辰夫。

長尾 すんまつせん、すんまつせん：：おっが、鉄柱ば支えとかないかんとに、手ば滑らせ
てしもうて！そいで！

辰夫 よかたい：：だいにでん：：間違いはあるたい：：。

繁吉 貫一、タンカば！

繁吉と貫一はタンカを取りに行く。

辰夫が気を失いかける。龍二、辰夫を抱き起こして気を奮い立たせる。

徳多 辰夫。

龍二 しっかりせんか！

辰夫 おっとしたことが：：。

龍二 足に落としたつか。

辰夫 重さば計算せんで、積み上げようってしたら一気に鉄柱の崩れて：：おっにも油断の
あった：：。

徳多 龍二、はよあげんならまずか。

龍二 (マサに)人車の用意ばしてもらってくれ。

正嗣 上げてもらえるとかね。
龍二 急がなか！出血のひどかけん、ゆっくり出来ん！
正嗣 わかった！

龍二、徳多と交代し、自ら辰夫のケガの場所に枕木を当て布でしぼる。

辰夫 龍二くん、すまない。

龍二 なんばいいよつか。

徳多 辰夫、今、上に上げてやるけんな。

繁吉と貫一がタンカを持ってくる。

手際よくみんなで乗せる。

長尾はショックで立てない。

龍二 長尾。

徳多 よか龍二、行くぞ。

龍二 ああ。

長尾を残して、みんな去る。

境が出てきて、事故の様子を追いながらカメラに収める。

少し間。長尾の姿も撮る。

場面7／昭和三十六年（一九六一年）十一月〈底幽霊〉

三池争議以後、2回目の秋。夕暮れ。龍二の家。

玄関から聞きなれぬ男の声。

葉山（声） こんにちはー。こんにちはー。

以前とは違い、どこか風格さを感じさせる葉山が、庭のほうに現れる。
辺りを見回すが誰もいない。「岸岡さん……いないか……」通り過ぎて奥へ。

そこへ貫一と千夏がやってくる。

千夏 兄ちゃん：・兄ちゃん、どげんしたと、急に練習ばやめて。

貫一 千夏、もう今日の練習は終わりたい。

千夏 兄ちゃん、なんか龍二さんに用のあったと？

貫一 お前には関係なか。はよ、帰って、夕飯の支度ばしとけ。

千夏 (怒って) なん！ いっちよんわからん：・兄ちゃんのバカ！

千夏は怒って帰る。貫一は部屋の中へ。

どこからともなく草木まんじゅうを取り出してきて食べる。

シャーリー・マクレインを意識した梅子が来る。

梅子 龍ちゃん、龍ちゃんおるー？

梅子、物を食ってる貫一と目が合う。

貫一 ああ、梅子。

梅子 なんだ、貫一か。本名で呼ばんで。お店じゃシャーリーって呼ばれよつとやけん。

貫一 なんね食いもんね。

梅子 シャーリーマクレインよ。あゝ、あたしのジャック・レモンはどこ？

貫一 やっぱ食いもんやんね。

梅子 だけん違うて！

貫一 龍二さんならまだ帰ってきとらんごた。

梅子 どこ行つとるとね？

貫一 幽霊ば見に行く言うてから宮の原坑んほうへ行つたばってん。

梅子 なんて？

貫一 近頃、梓さんと仲よかもんね、龍二さん。

梅子 あの女も一緒ね！ なしてそいばはよ言わんとね！ あの女、いつまでのぼせとるんかねえ。親子して、龍ちゃんば騙す気やなかるうね：・(慌てて口を押さえる)

貫一 えっ？ 騙す？

梅子 いや、何でもなか。独り言たい。

貫一 ばってん、親子して騙しとるって：・

龍二、梓、繁吉、徳多が帰ってくる。

貫一 …ああっ帰ってきんしゃったごた。

梅子 じゃっ私はこのへんで。

梅子、急に弱気になって、裏のほうから去る。

貫一 おい、梅子、龍二さんに会いに来たとやなかと？
梅子 あの女が横におるやなかね。

龍二 たちはさつき見た幽霊のことで怖がっている。

梓 ひやあく、こわい、くふあい、うふおはいく

龍二 誰か、あげんかとかさ行こうって言ったつは。

繁吉 龍二さんでしよ。

龍二 そやったー。

みんな、怖がっている。

貫一 …お帰りなさい。あれ？どげんかしたとですか？

龍二 出たー、出たばーい。

繁吉 ひとりり、ふたーり、いっぱいおった。

梓 あんね、私、あん中のひとりりと…じろく…目があつた！

みんな、ぎゃくつとびびる。

徳多 あん辺りは明治時代、囚人ば使つとつたとこたい。

梓 もしかして鎖につながれて坑内に？

徳多 ああ。

梓 さつき見た幽霊と一緒に…

徳多 今も毎日働きに出よつとかもしれんばい。

想像すると怖くなってくる感じ。

そこへ葉山の明るい声。

葉山 もしかしてそれは、三池集治監のことをおっしゃってるんでしょうか？

みんなが声のするほうを見る。

そこには、きりつとした感じで立つ葉山がいる。一礼する。

徳多 おお、お前さんは…。

葉山 ご無沙汰しておりました、葉山です。以前、坑内視察の際、職員であった未熟な私の命を落盤より救って頂きました。岸岡さん、覚えていらつしやいますか？

龍二 (思い出す) ああ、あん時のメガネか？

葉山 はい、あん時のメガネです。あの後、通産省へと出向きまして、晴れて今年の4月より鉱務監督官として三池に帰ってまいりました。

数人 へ。

徳多 見らんまにずいぶんと立派になってからー。

葉山 …あの時の落盤は私にとって大きなものでした。それまで頭の中でしか考えたことのなかったことが実際に目の前で起こった。私は坑内に下がる労働者の立場にたつて本当に考えていたのかと反省させられました。目の前のあの現実に気付いてなければ、未だ大企業の傘の下で暗澹として生きていたと思います。あの時、私の人生までも救って頂いたような気がなりません。本当にありがとうございました。

徳多 (会心の笑顔で) よかよか、そげん堅苦しかあいさつはよか。

葉山 皆さんもお元氣そうで何よりです。…あつ私は幽霊じゃありませんよ。

空気が和む。

繁吉 集治監って言うとは、あん牢屋のことですか。

龍二 そうたい。珍しかて思うて連れていったたい。

梓 龍二さん、一番に怖がったよ。

徳多・繁吉 (激しく同意)

葉山 官営の三池炭鉱は明治六年に発足していますが、50人の囚人労働から始まっていきますね。その後、明治十二年に集治監制度が制定され、「西南の役」の国事犯であった二千七百六十人を収容するために、東京と宮城に内務省直轄の集治監が設けられました。しかしやがて、それらがいっぱいになったという理由で、ここ三池に建設されたというわけです。ただ、この決定は、初めから囚人を使って炭鉱を開発しようとする国の方針だったようです。その後まもなく政府は三井家に営業権を払い下げ、「三井三池炭鉱」が誕生。三井は囚人労働の継続を求め、許可されたというわけです。

徳多 さすがによう勉強しとるな。

葉山 いえ、それほどでも。

梓 ……。

龍二 ん？梓どげんかしたか？

梓 いや…自分の生まれ育った場所なのに、そんなことがあつたなんて全然知らなかったから。

龍二 こん町にはまだたくさん秘密のつまつとるごたな。

そこへ徳多の妻・多恵子がやってくる。

多恵子 お父さん、お父さん…

龍二 あつトクさん。

徳多が気づく。

徳多 ああ。

多恵子 やっぱり龍二さんとこやったですか。あの鯉は、どげんすつとですか？

繁吉 コイ？

多恵子 池に移すとか移さんとか…。

徳多 そうやった。

葉山 ああ、お忙しければまた今度ゆっくりした時にでも…

徳多 いやいや、ちょうど良かった、今な、うちで鯉ばこげん、いっぱい育てよるったい。せっかくやけん見ていかんね、そんないだにうちんもんに飯ば作らせるけん。多恵子、よかよな？

多恵子 ええかまわんですよ。

葉山 いやそんな急には申し訳ありません

徳多 よかと。龍二たちもよかな。あとでうちで飲もい。

龍二 ああもちろんたい。梓も行こうや。
梓 うん。

多恵子 じゃあ、もうしばらくしてから来てくださいね。うちん中、散らかってしもうとるけん人ばいれられんハハハ。じゃあ。

多恵子、そそくさと帰る。

続いて徳多と葉山も。

徳多 じゃあお前たちあとでな。

葉山 急にお邪魔してすみませんでした。

龍二 うんにゃ。じゃああとで。

龍二、何か物憂げにしている貫一を見る。

龍二 なんか別人のごと変わったですねえ。…ん？貫一、どげんした？

貫一 はあ

貫一。少し間。

繁吉 あっじゃあ、龍二さん、あとで呼びに来ますけん。

龍二、梓をちらつと見て、

龍二 ああ、勝手に行つてよかぞ。おつも日の暮れたら行くけん。

繁吉 えっ？そげんですか。分かりました。じゃあ、えーつと梓は…

梓 私はお父ちゃんの仕事が終わつたら一緒に行こうかな。

繁吉 あっそうだ、じゃあそいまでマサさんば撮つた写真でん見てみるね？

梓 えっあると？

繁吉 おつが撮つたやつばつてん。

梓 見たかあ。お父ちゃんの写真なんてうちに全然なかもん。

繁吉 (笑う)

龍二 あっそうやった繁吉、お前なんか用のあったじゃなかか。

繁吉 えっ？

龍二 ほら、奈津子から頼まれて、ほら

と強引に繁吉を外へ出そうとする。

繁吉 えっ、あれっ、えっ、あれっ……なんやっただけ？奈津子から？

しまいには龍二、繁吉を殴って外へ。

龍二 屋根の壊れたて言いよったぞ、あっあと、玄関の戸口も閉まらなくて言いよった。

繁吉、無理矢理押し出されて消える。

龍二、梓とふたりきりになる。

日も陰り、遠くで雷が鳴る。

龍二、梓をちらっと見る。そして何やら呪文を唱える。

スマリナーニセワーシ、トツキハタナー、タツカワガミーンノンミュジノコ、イ
サダクミシノタオ、リキューゴ、ソコウヨニ、シーノキビヒン……エウコンネキ
ン、ネウシユツジ、チダワンダキゲ……

梓 それ、何？

龍二 幽霊の集まる呪文……

梓 今のが？

龍二 子供ん頃、こげんか呪文ば言いよったつちゃんなあ。……こいば唱えると幽霊の出でくるって。さっきの収置監だけやなか、四つ山のやぐらとか、閉鎖になつとる坑口とかでな。……今考えると、あいは誰かが囚人や炭鉱マンば幽霊と間違えて、そん噂が広まつたんやなかるるか。スマリナーニセワーシ、トツキハタナー……

梓 もう怖いやる。

龍二 そげんか。せいならおつが守ってやらんばいけんな。

龍二、ここぞとばかりに一度抱きしめるが、梓すぐに離れる。

梓 ちよっとー。

龍二 なつよかやつか、ちよっとだけたい。

梓 なんがちよっとね、

龍二 そげん言わんでから

梓 そげんもこげんもどげんもなか！

梓、活発なところを見せ、護身術で龍二の腕を後ろに回す。

龍二 いてー！どこでそげな技ば覚えたとか。
梓 東京にいる時、習ったと。

龍二 いてててて。おっがそげん憎らしかか？

梓 違うばってん、龍二さんだけはつきあわんほうがよかってお父ちゃんから言われとうもん。

龍二 かく、マサ。いてっ。まいった！降参たい。

梓、龍二の腕を緩める。

龍二 変わっとるな、お前も。

梓 ううん、普通の25歳です。

龍二 もう結婚ばいい加減考えばいかんぢやなかか？

梓 みんなそげん言うよね。お父ちゃんは好きにしてよかってしか言わんもん。

龍二 嘘ばい、嫁に出しようなかだけたい。

梓 そやろうか？

龍二 ああ。

梓 …この頃、時々ね、東京にまた行ってみたいなあとか思ったりもすると。

龍二 気持ちは分かるばってんマサの面倒は誰がみっとか？

梓 分かっている。それはそうなんだけど…。

さつきよりも雷の音が近くなる。

龍二 暗くなったな…電気ば(電気をつけようとする)

梓 あっ星？

龍二 えっ？

梓 今、流れた。

龍二 んなことあるか。空ん曇っとうやつか。雷も鳴ってから(鳴ってるので)もうすぐ天気崩れるばい。トクさんちもう行っとか。

梓 あつまた(流れ星)！

龍二 えっ？

龍二も空を見る。曇り空の中、かすかに星が流れる。

龍二 ほんなこったい。珍しかこともあつとやな。

梓、手を合わせ、願い事を。龍二、梓を見つめる。

梓 …よし、と。

龍二 なんば願ったと？

梓 好きな人たちといつまでも一緒にいられますように、って。

龍二 おっのことか。

梓 人たちって言いよるやろ。

龍二 おっは入っとらんとね。

梓 知らん。

龍二、空を見る。また流れ星が見える。

龍二 あーまた：きれーかもんやな。：あんな、梓、坑内にも流れ星の降るとぞ。

梓 えっ？

龍二 おったちが人車で坑道ばこう下っていこうが。そんな時、車輪とレールのこすれて、ぱーって火花が出るったい。あん時乗ってて思うったいな。こりやおったちは流れ星たいなあ、明るか星が坑内奥深くへと流れていくったいなあて。おっは詩人やな。

梓 へー似あわーん。

龍二 失礼ぞそいは。

龍二、梓につい触れる。龍二、離れる。梓も変に意識する。

梓が「上を向いて歩こう」を口ずさむ。

龍二 よかね(いいねその曲の意)。

梓 簡単よ。

梓が龍二にこの歌の指導。

ヤマに出演する囚人たちの亡霊が現れる。

誰にも見えない。見えるのはクロアゲハの群れだけ。

梓 あっ

龍二 どげんした？

梓 あれ：：チョウチョ：：？

龍二 おお：：クロアゲハチョウの群れたい！

梓 なんかくつくりゆつくり飛んでるね。

龍二 クロアゲハは死体に群がるチョウたい。霊たちがここらにおるっちなかろうか。

梓 またー、もうやめんねー。あっ：：たくさん集まってきた。

龍二 囚人の話ばしたけんか？

梓 呪文かもしれんね？

龍二 あんな、牢屋ん地下には拷問室のあつてな、囚人は規則ば破ったら、光りの入らん部屋に閉じ込められたったいな。窄衣(さくい)ちゅう腹巻きんごたつとば着せられて、

そいは乾いたら皮の縮んでから徐々に息が出来んごとなつたりしたらしか。やけん拷問に耐えきらんで自殺するもんもいてな、豎坑の上がり下がりする昇降機のくさ、すれ違ふ瞬間に首ば出して、チョン：：こわかる(がー：：)

その間に梓は去っている。

龍二は怖がらせるつもりが自分が怖くなる。

龍二 あれ？梓？…梓？もう行ったとか？おい！

音楽が高まり、幽霊たちが現れる。どこか哀しい面持ち。

龍二は去ろうとするが、誰かいるような予感がして振り向く。
そのまま龍二は去る。

場面8／昭和三十七年（一九六二年）十一月〈少年の夢〉

一転して、けたたましい機械音とうだるような暑さの坑道である。

繁吉 よかですよ、今手の空いたですけん。…どこおつとですか？あつそうか…

境との合言葉を示す。

繁吉 （オツペケペー調で）よっ！炭ばっぱー、炭ばっぱー、炭ばっぱー、穴からお宝取り出して、炭車で運んで港まで、よっ炭ばっぱー、炭ばっぱー、炭ばっぱー、港じゃ外国行く船が、つぎつぎお宝積んでゆく、炭ばっぱー、炭ばっぱー、

境が出てくる。繁吉のリズムに合わせる。

境 よっ、こぼれたお宝かき集め、おいらはこっさり金稼ぎ、よっ炭ばっぱー炭ばっぱー、はい

繁吉 ばってん好きな女子に金かかる 服に指輪に金ばっぱー、よっ、（ゆっくり）かねーばっぱー…はい、

境 （まだ続ける）よっ、宵越しの金♪酒に消え…（つつこんで）いつまでやるの！

繁吉 この合言葉長かですね。

境 今から流行るぞー。

繁吉 いやあ（それはどうかな）。

境 …で、近頃はどんな様子かな？

繁吉 ああ、そいがどうもよか写真の撮れんで…。きつか採炭現場にやらさるし出炭量ばあげろてうるさかし、きつうして休みん時になかなか出られんとです。

境 そうかあ。まっそういう時もあるな。

繁吉 （がっかりして）はあ…

境 （明るい感じ）しかし続けていたらいいこともあるもんだ…

繁吉、境の表情が明るいのが気になる。

繁吉 はい？

境 繁吉くん、ついにチャンスが来たぞ。

繁吉 えっ？

境 今までこつこつと撮りためてきた写真がね、「炭鉱マンの暮らし」という一冊の本の中で使われることになった。

繁吉 どげんか意味ですか？

境 三池争議という大変な闘いがあったが、しかし炭鉱マンの多くは元気に日本の未来のために石炭を掘り続けている、っていう内容の本なんだ。全国で売られる予定だ。

繁吉 まさかそいにおっの写真が？

境 そういうこと。

繁吉 境さん。

境 君は実に炭鉱マンの色々な姿を写真に収めてくれた。坑内で働く様子だけじゃなく、例えば紙芝居を子供たちに見せているところ、夏の日思う存分海で遊んでいる姿、生活に困っている仲間に金を貸す友情あつき光景、町でケンカを止めに入っている緊張の場面、実に様々だ。

繁吉 (照れる) いやあ。

境 だからぜひ君の写真を使えればと思っっているんだけどね。ただし、君が了解してくれたら、の話だ。

境、繁吉に一冊の本を渡す。

そこへ徳多がやってくる。

しかし、ふたりが話しているため、陰から様子を伺う。

繁吉 ええ？了解も何も、問題なかですよ…あつ、こげん、おっの写真が載るとですか？
境 (あいまいな感じ) んん…

境、意味ありげな表情。繁吉、本を見たまま黙り込む。

繁吉 これは…。

境 少なくとも君の今の生活が十分潤うだけの金は手にすることが出来る。

繁吉 ひどか…。なんですか、こん写真の見だしは？どれも間違っつつです。

境 それでいいんだ。会社から任された仕事だから、多少は演出がいるんだよ。

繁吉 おっはこげんか写真は撮っとらん！紙芝居を見せ子供たちから金をせしめている？
仕事をさぼって海で遊んでいる？坑内で拾った財布を自分のポケットにしまっている？
殴り合いのケンカを周りではやしたてている？…境さん、

境 いやいや炭鉱マンはこういうあらっばいところもあるでしょ？しかしそれが大きな活力につながっている、そう見せたほうがドラマになっていいんだよ。

繁吉 ばってんこれは嘘っちゅうもんです。

境 だから…現役炭鉱マンが撮ったとなれば説得力があるんだ。

繁吉 そげんかと…なら、おっは載せてほしくなかつた。断ります。

境 冷静に考えてみたほうがいい。

繁吉 おっは頭のわるかですけん細かことは分からん。ばってん、こいはなんか間違つてるです。

境 もつたいないなあ、せっかく自分の夢に近づくチャンスなのに。

繁吉 夢？

境 そう。憧れの写真家。

繁吉 みんなば裏切るような真似は出来ません。

境 …分かったよ、そこまで君が言うなら仕方ない。あきらめよう。

繁吉 そげんですか。

境 しかし、名前は出さないが、写真は使わせてもらおうよ。

繁吉 はっ？

境 そりやそうだろ、これまでに君にいくらかけたと思ってるんだ。フィルム代もけつこ
うな額になるんだぞ。それだけじゃない、飯や酒だつて何度ご馳走してきたことか。

繁吉 こすか、最初からそげん考えやつたんじゃなかですか？

境 せっかくいい写真撮ってるんだ、使つてあげないと写真たちがかわいそうだろ。

繁吉 こげんか風に使われるほうがよっぽどかわいそかです。

境 君に悪いようにはしないから。私を助けると思つて、お願いだ。

繁吉 ばってん、

徳多が現れる。

境 ああ(いたんですか?)

繁吉 トクさん。

徳多 そいだけはせんでやってくれんか。

境 これは彼との話です。あなたには関係ありません。

徳多 仲間ん傷つくことであつたらおっは許さんつて言つたらうが。

境 あのね、これは私にとつて大事な仕事なんですよ。

徳多 ここは坑内やけんな、おっの指示ひとつでお前さんば出さんごと出来るとぞ。

境 かあ、おどしですか?…あのね、ネガはここにはないんです。あらためて空気のきれいなところでお話ししませんか。

徳多 出さんつて意味が分かつたらんな。誰にも気づかれんように一生ずつとここにおつてもらつたちゃかまわんとぞ。

境 ええ?…(咳払いひとつ)…それは困るなあ。

徳多 おつと約束してくれんか。

少し間。

境 本気ですか。

徳多 当たり前前たい。

境 (ため息ひとつついて)：・繁吉くん、君はいい上司を持って幸せだな。

繁吉 えっ？

境 私はいつもひとりだったからね。こういうことでもしないと生きていけないようになってしまったんだ。(徳多に)分かりました、彼の撮ったものは：・使いません。

徳多 そげんか。

境 (繁吉に)嫌な気持ちにさせたね。

繁吉 すんません。

境 謝らなくてもいい。

徳多 :・ばってん、あんたは金で動かんとやなかったと？

境 そんなつもりじゃありませんよ、夢でしたからね、本出すことは。まっ一度出来上がったら読んでみてください。名前は出しませんが、あなたや岸岡さんのことも書こうと思っっていますから。

徳多 字は大きめに頼むな。老眼。

境 (軽く笑って)では失礼します。

複雑な表情で去る境。

繁吉、ほっとしている。

繁吉 (感謝しつつ)トクさん、

徳多 よか、何も言わんで。

繁吉 はい。

徳多 ばってん、

繁吉 えっ？

徳多 夢は多かほうがよかぞ。写真やむんな。

繁吉 はい！

そこへ正嗣がやってくる。まるで声をかけられたくない様子。

徳多 おっマサ。

正嗣 なんしよつとね、こげん人のおらんとこで。

徳多 用事のあったたい。お前こそなんばしよつとか。今日の現場はいつちよん違う場所やっつたろうが。

正嗣 んああ、まあよかやなかね。

正嗣、そそくさと去る。

繁吉 あれ、マサさん?：・こんなところ、一緒の現場も少なかけん、気になっですな。

徳多 まあ、上品な愛娘と、下品な龍二の仲がよかけん、気ばもんどっちやろ。

繁吉 そげんですかね。
徳多 よし、繁吉、仕事に戻るばい。
繁吉 はい。

徳多と繁吉、仕事に戻る。

徳多 助けてやったけん、なんばしてくる？
繁吉 やっぱ腹黒か。

場面9／昭和三十八年（一九六三年）3月〈ゴンゾウ〉

暖かな陽気に包まれた初春の頃。龍二の家。

辰夫が大ケガをしてから1年半がたっている。

梓が床拭きをしている。

そこに楽しそうに梅子がやってくる。

梅子、梓を見るや、不機嫌に。

梅子 すっかり女房気取りやないねえ。

梓 あっ、梅子ちゃん。

梅子 あんまり本名で呼ばんでって。

梓 あっごめん、えーっとシャリーだったっけ？

梅子 リタよ、リタ。名前変えたの、リタ・ヘイワース。

梓 誰それ？

梅子 アメリカじゃ有名な女優よ。日本じゃ先にマリリン・モンローのほうが有名になつたてアメリカ人のお客さんが言ってたわ。

梓 へー。梅子さん、あつリタさんは外人さんとも話が出来てすごかねえ。

梅子 日本語を英語っぽく言ってるだけよ。コンバンワ、サケ、スキデスカ？オキヤクサン、ノミップリイネ、なぜか通じるのよねえ。で、あんたは龍ちゃんちで何ばしよつとかね。

梓 仕事よ、仕事。

梅子 仕事？

梓 掃除、洗濯。お金払うからしとってくれんか、って。

梅子 なんか変なか、そい。

梓 よかと、私も何か働きたかったけん。…何か用のあったと？

梅子 ああ、おらんならよか。…あつそうたい、

梓 うん？

梅子 マサさんさ、近頃どげんもなか？

梓 お父ちゃん？うん、別に…

梅子 何も知らんごたね。

梓 えっ？

梅子 近頃、新労の人と付き合いがあるみたいなんよね。

梓 第二組合ってこと？

梅子 しっ！誰が聞いとるか分からん。

梓 本当なの、梅子ちゃん。

梅子 ああ、何度も見かけとるもん。

梓 そんな。

梅子 もし龍ちゃんの知ったら：どげんなるか分からんねえ。組合が違うだけで子供まで「あそこん子とは遊んじやいかん」ち言われるし、隣同士でん口ばきかんこともあつとやけん。ここにきんもんは気性の荒かねえ。

梓 聞いてみるけん、誰にも言わんでもらえるかな？

梅子 そいがね、黙っとく自信のなかねえ。うちもお得意さんには面白か話のひとつでもせんといかんけんねえ。

梓 ……。

梅子 こげんことがばれたら引つ越さんといけんね。

梓 どうしたら黙っとつてくれると？

梅子 あたしき、前は龍ちゃんと仲良かったとよ。あんたが帰ってくる前までは。

梓 ……。

梅子 (本当か嘘か)ふたりで博多まで出かけたこともあつた：。ばってん龍ちゃん、都合のよかけん、うちとは付き合ってくれんやった。まあこげん隣近所もなかごたところやけん、付き合うもなんもなかけど。ばってん、勝手に出ていって、勝手に帰ってきたあんたが、龍ちゃんの気持ちば独り占めするとが許せん。

梓 梅子ちゃん：。分かった、じゃあ龍二さんとは話さんようにする、それでよか？

梅子 あらま、さすが東京におつただけあつて男女関係もさばさばしとんなはる。じゃあとは親子で解決ばしてもらつてと：。さよなら。

梅子が去る。ゆっくり奈津子が出てくる。梓と目が合う。

梓 なつちゃん。

奈津子 うん。

梓 やだなあ、聞いとつたと？

奈津子 梓さん、そいがもし本当のことやったとしても、うちは何も変わらんよ。きつとのおぶさんもそげん言うと思う。：。なんか困つたことのあるたらホント言うてね。

梓 ありがと。

そこへ貫一がやってくる。何か慌てている。

貫一 ど、どげんしよ、

奈津子 ねえ、なんかあつたと？

貫一 た、たいへんなことなつた、龍二さんが：。龍二さんが

奈津子 貫一、落ち着いて。

貫一 裏切りもんは許さんって。
ふたり えっ？

梓 (つぶやく) お父ちゃん…？

貫一 うううんにゃ長尾ばい。長尾が第二組合に落ちたちゆうて怒ってから…。

遠くから龍二の声がする。

龍二(声) さっさと歩かんか、どげんなつとるとか。いいけんとりあえずこつちこんか。

周りから徳多、繁吉のなだめる声も聞こえる。

「龍二さん」「龍二、ちよつと待て」

龍二、長尾をつかんだまま現れる。

龍二 ほら長尾、さっさとこつち入らんか。

龍二、容赦なく長尾を殴りつける。

龍二 きさん、なんば考えとつとか！えっ？恥ずかしゆうなかとか！己のしたことのか
つとるとか、こん裏切りもんが！

長尾 すんまつせん。

龍二 すんまつせんじゃなかとじゃ！

繁吉と貫一が止めに入るが歯が立たない。

徳多 龍二。

龍二 おつたちがどげな思いして、あん三年前の争議ば闘ったと思うとつとや！こげなこ
つでキヨさんに顔向け出来つとか！おつたちの誇りはどこ行つたとや！

長尾を投げ飛ばす。

長尾 もう耐えきらんやつたとです。

龍二 せからしか！おめーんごた根性無しはおつが鍛え直しちやる！

龍二が長尾をばんばん殴る。梓たちが来て止めに入るが、もはや手に負えない。
そこへ辰夫がやってくる。あとから正嗣も。

辰夫 龍二くん

徳多 辰夫。

辰夫、何とか龍二の動きを止めようとするがすぐには止まらない。

辰夫 もうそれくらいで勘弁してやってくれんね。

龍二 (腹立たしく) そげんか、辰夫、お前がそのかしたつちやな。

正嗣 違うて、龍二。

龍二 じゃなんか？

辰夫 長尾は貫一んためにやったことたい。

龍二、手を止める。

龍二 なんて？

貫一 みんな、すんまつせん、おっのせいです、長尾は第二にやってしもうたとは、おっのせいなんです。

長尾 なんば言いよつとですか！…違うとですよ、龍二さん。おっが金に目がくらんだとです。会社人から「お前やったらホントは今の倍は金ばもらつてよかとな、こいも意固地に旧労なんかにおるけん損ばしとる」て言われて、考えが揺らいだとです。

貫一 もうよかよ長尾。すまんかった。

長尾 なんば謝りよつと。

貫一 (龍二に) すんまつせん、おっが千夏の学費ば払えたらこげんかことにはならんやつたとです。…千夏の、看護婦になりたかって言うけん、学校にどげんかして行かせてやりとうて。ばつてん、うちにはそげんか余裕はなか、どげんしようもなかつたとです。

辰夫 龍二くんにはもういっぱい恩のあつけん、これ以上迷惑ばかけれん言うて。そいで長尾は鞍替えして、金ば工面してやったとた。

龍二 なんかさいは。

長尾 すんまつせん、すんまつせん。

貫一 長尾…。

そこへ千夏がやってくる。

繁吉 あつ千夏！

貫一 今日試験やつたとです。

千夏 行つてきたよ。

貫一 …そいで…どげんやつたとか。

千夏 うん、

少し間。千夏、みんなをじつと見て、そしてにっこり。

千夏 楽勝やつた。うち、勉強したもん。絶対、合格、間違いなしたい！

繁吉 そげんね！

長尾 やつたなあ、貫一！

貫一 うん。

みんなで祝福する。

千夏 あれ、兄ちゃん、またケンカばしたと？

貫一 えっ？

繁吉 あっじやあこれで仲直りたい。

正嗣 そやな。ほんなこつしよんなか兄貴やな。

千夏 うちが看護婦になっても傷の手当てげな、してやらんよ。

徳多 うん、せんでよか、飯食つときゃ絶対治る、こいは。

貫一 トクさん！

長尾が傷みをこらえて起き上がる。千夏、いちはやく手当てにかかる。

貫一 あっ千夏、長尾の手当てば：：あゝっ

千夏 (長尾に)ここ痛うはなかですか？消毒しとかんなら。

長尾 うん、あいがと。

正嗣 あら、長尾には優しくかやね。

繁吉 こりやまずかばい、貫一。

周りはやしたてる。千夏、心なし照れている。

貫一はひとり悔し泣き。

千夏 兄ちゃん：：兄ちゃん！

貫一 ん？

千夏 あとで投球練習ばすっけん、球ば受けてよね。

貫一 おっがや？

千夏 ほかにだいが受けきつとね、うちの球ば。

貫一 ああ、分かった。

辰夫、だまって帰ろうとしていると、龍二が声をかける。

龍二 辰夫。

みんな、動きを止め、龍二と辰夫のやりとりを聞く。

龍二 だめとか。

辰夫 うん。もうこっちはあんまりいうこときかん。

徳多 辰夫。

足をひきずりながら、龍二や徳多に近づく。

辰夫 今朝、退職願いば出してきました。

繁吉 (反応) ええ？

辰夫 ……こいじゃ坑内には下られんもんね。

龍二 辰夫、お前の、やめてどげんすつとか。お前はいつでん勝手に決めるとやけん。

辰夫 ……一度、里に帰ってみようかなって。両親の墓のある里に…。

繁吉 里…？

辰夫 実はおっのじいちゃんの代までは、与論島に住んどったとです。

周り軽く反応。「えっ」「与論島」「ヨーロンとかて」「辰夫さんが？」など。

龍二 そいは今話さんばいけんとか。

辰夫 龍二くん、あいがと。(周りに)細か頃から、島出身じゃ言うていじめられよるおっぱ、いつでん龍二くんは助けてくれよったとよ。

繁吉 島のもんがひどか目にあいよったては聞いたことあつたです。

辰夫 ヨーロンヨーロン言つてな。明治時代…じいちゃんたちの若つか頃に、島に大嵐の来て、被害の大きかったこともあつて、島原の「口之津」つちゆう港に集団で移つてきたとよ。そこじゃ炭ば船に積み込む仕事もあつたつた。

少し間。

辰夫 そいけん、おっのじいちゃんも石炭の船積みばしよった。船積みする人んこつば「ゴングウ」ていうて、こげーん長か六尺棒ばかついで、その端に天秤みたいにしてかごをかけ石炭ば運びよつたらしか。…こげーんして。ヤジロベーの辰夫はこつから来たんかもしれんね。

龍二 辰夫、もうよか。

辰夫 うん。みんな、いろいろありがとね。おっが島に帰つたら、みんなに写真ば送るたい。丘一面に咲く色とりどりの美しい花たち、青空の中つばさを大きく広げてはばたく鳥たち、透き通つた海に住む珊瑚や魚たち。…おっは美しかふるさとに帰ります。こいは最初から決まつつた運命やつたかもしれんね。…そうたい、ばつてん別に与論も日本の中なんやけん、いつでん遊びにこらるつたい。

徳多 どうしても帰るとか。

辰夫 はい。

長尾 (泣き声)辰夫さん…

繁吉 いつ出発するとですか

辰夫 早かばつてん、明日たとうて思とる。

みんな、反応。「明日?」「ええ?」「はやかねー」など。

徳多 くれぐれも体ば大事にせないかんど。

辰夫 はい。

梓 絶対、遊びに行くので、行った時は案内してくださいね。

辰夫 ああ。

徳多 こげんか時に限って、のぶのおらんなあ、奈津子。

奈津子 すみません。

辰夫 いや、明日、船でたつまでには会えるような気がします。

徳多 一緒に船に乗っとったらびっくりやな。

奈津子 そいはうちが困ります！

みんな、和む。長尾が「炭掘る仲間」を口ずさむ。

みんなもそれに応じて歌い始める。

龍二 辰夫！

みんなの歌声が止む。

龍二 今日は、久しかぶりに、ほんなこつ久しかぶりばってん……一緒飲もい。今晚は、ずつと寝らんでお前と話ばしたか。

辰夫 龍二くん。……世話になりました。よか、心の底から、本当によか仲間に会えたと思うとります。ありがとう。

勢いよく「がんばろう」が流れる。

その中でお互いを励まし、笑い合う仲間たち。

場面10／昭和三十八年（一九六三年）十一月〈炭塵爆発事故〉

徳多 昭和38年、1963年11月。争議から3年の月日がたつとった。…仲間がひとりまたひとりと辞めていくとは寂しくもんやった。仲間うちゆうとは、どこか遠くへ行ってしまうもんなんかの。…そう、龍二までもが三池ば離れることになるとは思わんやった。

葉山が龍二の家にやってきている。

葉山 （しかし）つい先日、徳多さんたちは三川坑のほうに移っておられますね。

龍二 ああ、急に三川（坑）に行ってくれーって言われたらしか。

葉山 他にはどなたが？

龍二 繁吉とマサやね。

葉山 そうですか。気になりますね。実は争議以後、出炭量に合わせるかのように、坑内の死亡事故が多発しています。一昨年在17人、昨年在15人、今年もすでに10人を越えている。

龍二 中入って調べられんとね。

葉山 それがそうもうまくは。何とか福岡の保安監督局と話し合つて、調査出来るよう試みてみます。

龍二 頼んだばい。よし、じゃあ飲みに行くか。

葉山 えっく？

龍二 そげん仕事ばかりしたらいかん。昼間から酒飲むとがよかたたい。

葉山 いやまだ勤務中ですよ…

龍二 酒ば入れんと体壊すぞ！

葉山 （困つて）はあ…。

そこへ貫一と千夏と奈津子がやってくる。

貫一（声） 龍二さーん。

奈津子（声） あっおらした。

龍二 …どげんしたとか？

貫一 龍二さん、会社ばやめるって本当ですか？

葉山 えっ？

葉山、龍二を見る。

龍二 トクさんの言ったつか？

貫一 はい。

龍二 口の軽かなあ。

葉山 岸岡さん、どういうことですか？

龍二 いや、前々から考えとったことたい。驚くかもしれんばってん、キヨさんが死んだ頃から考えよったたい。

葉山 (納得いかず) そんな。

貫一 ダメっす、絶対ダメっす。

龍二 ダメてなんか？

貫一 急に龍二さんがいなくなったら、おったちはどげんしたらよかとですか？

龍二 大げさやね。人間どげんしたっちゃ生きていこうとする力ば持つとりたい。もうそろそろお前たちもしっかりして嫁さんばもらわんと。

貫一 龍二さんがしとらんとにおったちは出来んです。

龍二 おっはもうよそさん行くけん、気にすんな。

貫一 そげんこと言わんで下さい。

龍二 そいで、奈津子

奈津子 はい？

龍二 お前はようつとのぶばつかまえとかな。

奈津子 すんません。ホントに落ち着きのなかです。

龍二 どうやらたぶん、最後まで出てきそうもなかけんよろしく言つといてくれ。

奈津子 はあ…

龍二 のぶはお前に遠慮してうちにあんまり帰らんとぞ。繁吉と仲のよかけん、て。

奈津子 本当ですか。あの人、そんなことば(思いよったなんて)。

龍二 自分が変わらんなら相手も変わらんもんね。

奈津子 はい…。

龍二、葉山を見て、

龍二 いつもうちはにぎやかだったい。必ず誰か来とるけんね。

葉山 岸岡さん、本当にやめられるおつもりで？

龍二 ああ。よか機会たい。

葉山 もしかすると退職勧告でもあったんじゃ？

龍二 ……。

葉山 岸岡さん？

龍二 三池の大家議は一体何やったんやろうなあ。こんままじゃ労働者がどんどん力ば失うていくばい。おったちは勝ったとか、そいとも負けたとか。

そこへ梅子が入ってくる。

梅子 龍ちやくん、龍ちやくん。

龍二 うるさか、今、お客の来とろうが。

梅子 龍ちゃん、いかんばい、なーしやめてどっか行くとか言いよつとね？

龍二 もう聞きつけたとか。

梅子 どこさん行くて言うど？

龍二 いっそのこと北海道の牧場でん行くかいな。土地開拓も夢があつてよか。

梅子 もうあん女とは縁の切れたとやなかつたど？

龍二 そいけん、ひとりで行くつたい。

梅子 うちはどうげんしたらよかと？

龍二 よか男ばつかまえて結婚でもせんか。

梅子 よか男は龍ちゃんしかおらん。

龍二 おつは梓にふられたとやけん、よか男じゃなか。

少し間。

龍二 まっそういうこつたい。今日ぐらいはちよつとひとりにしてくれんか。

まわり、少し戸惑う。

葉山 岸岡さん、今日はこれで失礼します。

龍二 そうね。

葉山 何かあつたらぜびご連絡を。

龍二 分かつた。

葉山が去ろうとしたその時、
遠くで「ドーン」というにぶい音が伝わってくる。

龍二 なんやあん音は？

葉山 この地響きは坑内のものです。

千夏 あーっ！あれ！

葉山 ああ！

龍二 ……なんかあん煙は？

いち早く龍二が去る。追って葉山たちも去る。

それぞれの混乱ぶり。

徳多 予想もせんやつた、あの大きな、とてつもなく大きな坑内事故が起きた。11月9
日の日の出来事たい。三川坑内で突如として起こつた炭塵による爆発は、十数キロ先の
社宅が揺れたほどすごか爆発やつた。

三河坑の坑口。繁吉がいる。

そこへ龍二が作業着を着ながらやつてくる。

繁吉 龍二さん！

龍二 大丈夫か。

繁吉 はい、今日は三番方でまだ入っとらんやったです。

龍二 被害のほうはどうげんか？

繁吉 まだよくわからんとです。今、執行部で救護隊ば編成してますけん、申し込めば中に入られるつちゆうことです。

龍二 よし、そいで中入るばい。

境、現れる。中へ入るつもりで炭鉦マンの格好。

境 たいへんなことになりました。係員たちもかなり混乱してますね。

龍二 お前も一緒に入るんか？

境 いち早く被害状況を伝えてみせますよ。

龍二 坑内は危険ぞ。爆発ん時はCOが発生しとる。

境 一酸化炭素。

龍二 命の保証はなかぞ

境 ええ、覚悟はいつでも出来ています。

重なるようにして、人車の音が入る。

一度あたりが真っ暗になる。

ひとり、またひとりと、キャップライトをつける。

事故現場に到着。

境 ひどい状況だ。炭塵が吹きつけられて坑道の枠が真っ黒になっている。

遠くから救護隊の音がする。

声 おーい、もうすぐ地上にでらるつぞー！ここで迷わんごつ上がるとぞー！

繁吉 あっ！助かった人のおったとですな。

龍二 違うばい。あいは死んだもんの魂が坑内ば迷わんごと、声ばかけながら上がりよつたい。

繁吉 そうなんすか。

境 (倒れている徳多を見つけ)あ、あれは・・・？

龍二 トクさん！

龍二が徳多を抱きかかえる。なんとか徳多、意識を回復する。

境は周りをつぶさに見てくる。

徳多 ああ、龍二か？助けに来てくれたとか。

繁吉 トクさん。

徳多 ちよっと起こしてくれんか？

繁吉 はい。

境、戻ってきて、

境 ひどい状況だ。あつちは係員がガス濃度を計測中のため、行けないそうです。

繁吉 よりによって一番人の多く入った時に。

境 一番方が仕事を終えた直後、二番方が下ってすぐの時ですか。

繁吉 龍二さん、係員から移動しろとの指示が出てます。

境 とにかく生存者捜すことが先決ですね。

繁吉 龍二さん？…何ばしよつとですか？

龍二が立っているところへ、みんなが近づく。

繁吉 (見つけて)こ、こいは！…こいは！

みんなのキャップライトが一斉にある一点に集まる。

その光が横たわる正嗣を照らし出す。

繁吉 マサさん！

龍二 …マサ。

繁吉 まだ生きとるかもしれん。

龍二 もう、息ばしよらん。

映画のフィルムの音。

葉山が現れる。記者会見の様子。カメラのシャッター音など。

葉山 えーお静かに。三川坑第一斜坑、ボタを満載した十両編成の炭車が鉱底から地上へと引き揚げられている最中の事故と思われます。坑口からの距離が千百八十六メートルに達したところで、突然、二両目と三両目の炭車をつなぐ連結リンクが切れたようです。炭車の重さは一両につき約四・二トン。地上にある巻き上げ機が炭車に接続されたワイヤを巻いていく仕組みとなっています。

フィルムの回る音が強くなる。

坑道の斜坑角度は約十一度五十分。坑口から地下三五〇メートルの基幹坑道と交わる鉱底まで、千七百メートルの長さとなります。斜坑口は見た目にもかなり急傾斜に思われます。連結リンクが切れた三両目以下八両の炭車は、斜坑車道のレールの上を鉱底に向けて逸走しました。つまり炭車が暴走したということなのです。

真っ暗に煙の立ち込めた空はまるでそこだけ夜の空。

流れ星が一筋、流れる。

坑道の鉄製の杵を引き倒し、ベルトコンベアーのフレームに衝突、鉋底の少し手前でや
っと折り重なって停止したと考えられます。一瞬で停電となり、その直後、ドーンとい
うかなり大きな爆発音とともに、黒い煙が第一斜坑から地上約百メートルまで噴き上が
りました。：第一回の入坑調査からは、以上が推測され、大筋において過去最悪の「炭
塵爆発」と断定していいと思います。詳しい原因については、これ以降の調査をお待ち
下さい。

起きあがることのない正嗣が龍二の家に運ばれる。

梓が先に入り、身を整える。

龍二 マサば部屋ん中に。

梓 ちょっと待って。

奈津子 梓さん、どげんしたと？

正嗣の遺体が家に入る前に、梓、両手をつく。

梓 ……お父ちゃん、お帰りなさい。：…今日もよう働いて疲れたろ？…体ばきれいに
せんといけんね。

龍二 梓…。

みんながふたりを囲む。徳多がすこしよろめく。

多恵子 あんた、大丈夫、うち帰って少し休んだほうが。

徳多 外で空気にあたってくるけん大丈夫たい。そいよりマサンことば。

多恵子 はい。

徳多はゆっくり外に出てくる。そこへ葉山が現れる。

徳多 あんたか。：…あんた、忙しくなったな。

葉山 はい。

徳多 こげんか炭塵爆発は、なして昔からよう繰り返さるつとやろな。

葉山 (悔しそうに) 私がもつと徹底した指導をしていればこんなことには。

徳多 悔やんでもしようがなか。ばってん、今やらないかんことのあるうが。

葉山 はっ…。

徳多 炭塵爆発ん時はなんが残るね？

葉山 残る？…熱で変質してしまった炭塵のことですか？

徳多 そいが坑内に残つとれば、どれくらい炭塵がたまつとたか、逆算出来るとじゃなか
とかな？

葉山 そうだ！

徳多 おつが会社の人間やったら、そげんが目の前にあつたらどうするかねえ。

葉山 まさか…証拠を？

徳多 (自嘲気味に) また労働者のせいにさるつとやなかか。

葉山 そうか。それなら急がなければ。あ、ありがとうございます。失礼します！

葉山が去ろうとするが、

徳多 あんた！

葉山 (立ち止まる)…はい。

徳多 おつたちは…おつたち炭鉱マンはどげんかことがあつても生きてみせる。どげんか未来の来たつちや生き抜いてみせる。ばってん、こん国の未来は、あんたみたいな人が正義ば貫いてくれんと救われん。ほんなこつ…頼んだばい。

葉山 その言葉、しっかり胸に刻んでおきます。

葉山が一礼して去る。

正嗣が眠る横に梓がいる。龍二は立ち尽くしたまま。

梓 龍二さん

龍二 ん？

梓 はよ、救護隊に戻らんば。…まだ少しでも助かる人のおるかもしれんやろ…。

龍二 梓…。

梓 私は、大丈夫やけん…。はよ、救護隊に戻つて。こういう時、龍二さんの力が一番いるとやなかかな。

龍二、無言のまま去る。梓、位置を変えて、正嗣の顔に触れる。

梓 …お父ちゃん。…お父ちゃん。お父ちゃんの顔、さわつたと、どれくらい前やったかなあ。小学生ん時やったかなあ…。こんな感じやたんよね…。すっかり忘れとつたよ。(顔を見て)…もう少し、甘えとけばよかった。これから、ひとりで、どうすればいいと、お父ちゃん…。(哀しみがおさまらない)もつと、もつとなんで長生きしてくれんやつたと。…お父ちゃん。

梓、正嗣を抱きしめる。

音楽が高鳴り溶暗。

場面二／昭和三十九年（一九六四年）三月〈旅立ち〉

うららかな春の日。龍二の家。

龍二 トクさん、世話になったばいね。

徳多 よう3月までおってくれたの。みんな、しばらく混乱しとったけん、おってくれて助かったばい。

龍二 いや。

徳多 京都まで遠かな。

龍二 ああ、ゆっくり行きたい。

徳多 （餞別を出して）こい：みんなん気持ちいたい。

龍二 こげんかともえんよ。困るばい。

徳多 こいはみんなの気持ちいたい。受け取ってやってくれんか。

龍二 ばってん。

徳多 よかけん。なっ。ほら。

龍二 そいなら。

徳多 うん。

繁吉たちがやってくる。「龍二さくん」など。

繁吉 あゝ、間に合った。旗ば作ってきました。

貫一 こいで見送りばしますけん。

龍二 そげん、おっぱ見送りたかや？

繁吉 いや、何て言うか、気持ちかね、こう…

奈津子 （お弁当を渡して）龍二さん、お腹のすいたら食べてね。

繁吉 あゝそういう気持ち！

龍二、殴ろうとしてやめる。

繁吉 あれ：殴ってくればよかとに。

龍二 奈津子、あいがとな。

梅子 龍ちゃん、うち、謝らんないけんことが。：うち、マサさんのことで梓ちゃんに

龍二 そいなら気にしとらん。前からマサが第二の連中と接触しとったことは知とった。

数人 ええ？

龍二 ばってん、おつもよう分からんことの多かつた。だけん、梅子がやったことはもう

よか。そいにな：マサはこっちん情報ば流しよったわけじゃなかつた。向こうにもマサ

と一緒で、ずっと娘と仲のようなかもんのおつたらしか。そいで相談に乗ってやりよつ

たらしか。おつたちに変な心配ばかけとなかけん、黙とつたとやろ。

徳多 マサがなあ…。

繁吉 ばってん、いったい誰からそげんか情報ば聞いたとですか？

龍二 そげんとは、のぶしかおらんやろ。

徳多 ほくのぶが。で、今あいつはどこ行つとるんか？

繁吉 奈津子。

奈津子 知つとつたらここに連れて来とるです。

徳多 ……あいつはすごかなあ。とうとう姿ば見せんやつたばい！

みんな、笑う。

梅子 ばってん、龍ちゃん…梓ちゃんとは…

龍二 うん、しよんなか、縁がなかつたたい…じゃあ、そろそろ行くけん。みんな元気でな。

徳多 龍二もやぞ。

繁吉 (泣きかけ)龍二っさん、お元気で！バンザーイ、バンザーイ

合わせてみんなやる。音楽かかる。

龍二が玄関のほうへ回ろうとすると、繁吉たち、先に外から回る。

徳多 おい、よかぞ。

境が龍二の靴を持って入ってくる。

境 これ。

徳多 うん…(龍二が)戻ってきた。

境と徳多が去る。龍二が戻ってきて靴を履く。

そこへ梓がやってくる。龍二と梓が見つめ合う。ふたりきり。

龍二 おつは何も出来んやつたとばい。死ぬことも出来んやつた。

梓 ……死なんで良かった。

龍二 こん先、何も分からん。幸せにでくつか分からん。

梓 ……一緒におるだけでよかよ。

龍二 今なら戻るよ。

梓 ……もう、切符ば買ったけん。

龍二 一緒に行くとか？

梓 離れとう、なかけん。

龍二と梓、抱き合う。汽笛の音。暗転。

場面12／平成八年（一九九六年）九月〈ひびきの石〉

重なるかのようにして四つ山堅鉦やぐらの爆破。
寂しいような眼差しで見つめる徳多と多恵子。そこだけに明かり。

多恵子 お父さん、とうとう…

徳多 ああ。

多恵子 これ、聞きますか？いつも流しとる、これ。

徳多 （本当に寂しそうに）うん…。

多恵子がラジカセにカセットを入れ、スイッチを押す。

坂本九の「上を向いて歩こう」が流れる。

少し間。

多恵子 これも一緒に持ってきましたよ。

徳多 うん。

徳多、多恵子から一枚のレコードを受け取る。

徳多 あの龍二が死んでしもうたなんてなあ。おつより先になあ。

セミの鳴き声。

全体が明るくなると、夢道がいる。

夢道 「・・・おつの石はもう何も聞こえんのやろうか？おつの石はまだ三池にあつとばつてんなあ」：一体何のことだったんでしようか。

徳多 ほんなこつ分からんね？

夢道 えっ？

徳多 あんたの父親のことばい。

夢道 父親：？あついやー！

徳多 そん目で分かる。よう似とう。その澄んだ美しか目が何よりの証拠ばい。

夢道 最初から分かって父の話を。

徳多 なして黙っとったとね？

夢道 正直、あまり父のことが好きではなかったです。：私が物心ついた時はもう京都にいたわけですが、本当に無口な人でした。その後、京都から大阪、そして神奈川と転々となりましたが、職を変わった理由さえ教えてくれませんでした。あげくの果てには私が結婚する段になって養子を薦めました。どんな父親かと思いましたが。：結婚を機に東京に出てからは、あまり親元に帰ることもなかったんですがね。：ですから、さっき、いろいろと知っているかのようなこと言いましたけど、実は一言もこの三池のことについて父から聞かされたことはありませんでした。

徳多 じゃあ…(さっきんとは)?

夢道 全部母親が教えてくれたことでした。

徳多 そうね。…昔な、龍二がこげんこと言いよった。「こん三池で掘れる黒か炭は、死んでいった多くの炭鉱マンたちの肺やもんね。炭鉱マンの肺はタバコば吸わん者でん真っ黒しとるけん」っちゆうてな。…おったちが今こうしてあるとも、死んでいった多くの炭鉱マンたちの代償の上にある、っちゆうことば龍二は言いたかったっちやろな。

夢道 すると、石というのは…

徳多 炭鉱マンひとりひとりが持つとる、ここ(心)のこつたい。龍二はこん三池ば去つてもずーっと炭鉱マンの気持ちは忘れとらんやつたっちゆうことかの。

夢道 ……

徳多 しかも、あんたが不思議に思っついでいづれ、ここに来ることば、龍二は分かつたつたかもしれんね。

夢道 「おつの石はもう何も聞こえんのやろか?おつの石はまだ三池にあつとばつてんなあ」(胸を押さえて)…そういうことか。気づかなかつたな。

少し間。

徳多 …母ちゃんは元気しとるんか?

夢道 ええ、もう足腰の弱くして動くのがやつとですが。今日ここであなたにお会いしたことは伝えます。

徳多 (喜んで)あはくそうね。

そこに奈津子にそっくりな信子が入ってくる。

信子 トクじい!トクじい!

多恵子 あら、また山ん中に入ったと?

徳多 のぶこ、お前もようあちこち行くなあ!

信子、トクじいに虫かごを見せる。

信子 トクじい、山ん上でチョウば捕まえたよ。これ何てチョウ?

夢道 あつ、クロアゲハ!死んだ人に集まってくるってチョウなんじゃ?

信子 げつ、そうなん!

徳多 うんにや、残念やったな。このあたりんとは全部、クロアゲハモドキちゆうチヨウたい。

夢道 モドキ?

徳多 ああ。昔はクロアゲハもおつたらうばつてん、今はおらん。…暗か死の歴史だけじゃなかつちゆうことかの。もういがみ合う時代は終わった。今じゃ会社の係員でつちや坑内作業ば手伝ったりするんやけんな。ずいぶん三池のイメージも変わったばい。

信子 トクじい、うち、チヨウの研究ばしてみようかな?

徳多 ああ、思ったことば何でんしてみらんね。そんなうち、何か興味のあることに出くわすやろ。ああ、多恵子、おっのことはよかけん、うち帰って信子に何か冷たか物でも出しちゃらんか。

多恵子 そうですかあ、じゃあ、わたしは先帰ってますよ。

徳多 ああ。

多恵子 信子ちゃん、行こうか。

信子 うん。…じゃあね、ばいばい。

多恵子 …また良かったら来てくださいね。

夢道 はい。

信子と多恵子、去る。

夢道 …徳多さん、ありがとうございました。

徳多 うんにゃ。おいは昔ん話ばしただけやけん。

夢道 いえ、来てみてよかった。あなたにお会い出来て良かったです。

徳多 ならよかばってん。

夢道 あの…

徳多 なんね？

夢道 …これから三池炭鉱はどうなるんですか？閉山が噂されてますが。

徳多 ああもうダメやろな。もったいなかなあ、あと百五十年分くらい炭は残つとるのになあ。

夢道 そうですか。…ここで働いていたのかあ(顔をふせる)

徳多 どげんした？

夢道 すみません。いや…出来れば！一緒に来てみたかったあ〜！

なごむ二人。幸せな時間が流れる。

徳多 まだ少し時間あんね？

夢道 ええ。

徳多 この辺ばまわってむんね。

夢道 けどお体…

徳多 ああ、まだくたばっちゃおられん。

夢道 (微笑む)

徳多 …おっが案内ばしちやろ。龍一の住んどったこの町をな。

夢道 …はい。お願いします。

音楽が高まり、夢道と徳多が町を見渡す。溶暗。

状況設定と登場人物

【現在】 1996年(平成八年)9月 炭塵爆発事故が起きた1963年(昭和三十八年)から33年がたっている。

中島夢道(32)・・・大牟田にやってきた青年。

徳多(3)・・・元炭鉱マン。回想の語り部。精神分裂気味で、どうやら痴呆症が出ている。

多恵子(60)・・・徳多の妻。炭鉱マンであった夫をつつましく支えてきた昭和の女。

.....

【回想】 1960年(昭和三十六年)三池争議〜1963年(昭和三十八年)炭塵爆発事故

龍二(32)・・・炭鉱マンのリーダー格。自由奔放、まるで子供のような無邪気さ、

梓(24)・・・正嗣の娘。話の中盤で東京から帰ってくる。

徳多(40)・・・ベテラン炭鉱マン。坑内のこともよく知り、会社からも一目置かれる。

辰夫(32)・・・龍二のライバル。三池争議の際、第二組合へ。何かにつけて龍二と対立。堺(33)・・・雑誌記者。海千山千の雰囲気。元ヤマ記者。

葉山(35)・・・鉱務監督官。

繁吉(25)・・・若手の炭鉱マン。

正嗣(45)・・・炭鉱マン。梓の父親。

貫一(23)・・・若手の炭鉱マン。

千夏(17)・・・貫一の妹。

長尾(24)・・・若手の炭鉱マン。

梅子(22)・・・場末のバーのホステス。

多恵子(27)・・・徳多の妻。

奈津子(22)・・・のぶの妻。

のぶ(?)・・・情報通の炭鉱マン。